

明治十五年四月出版

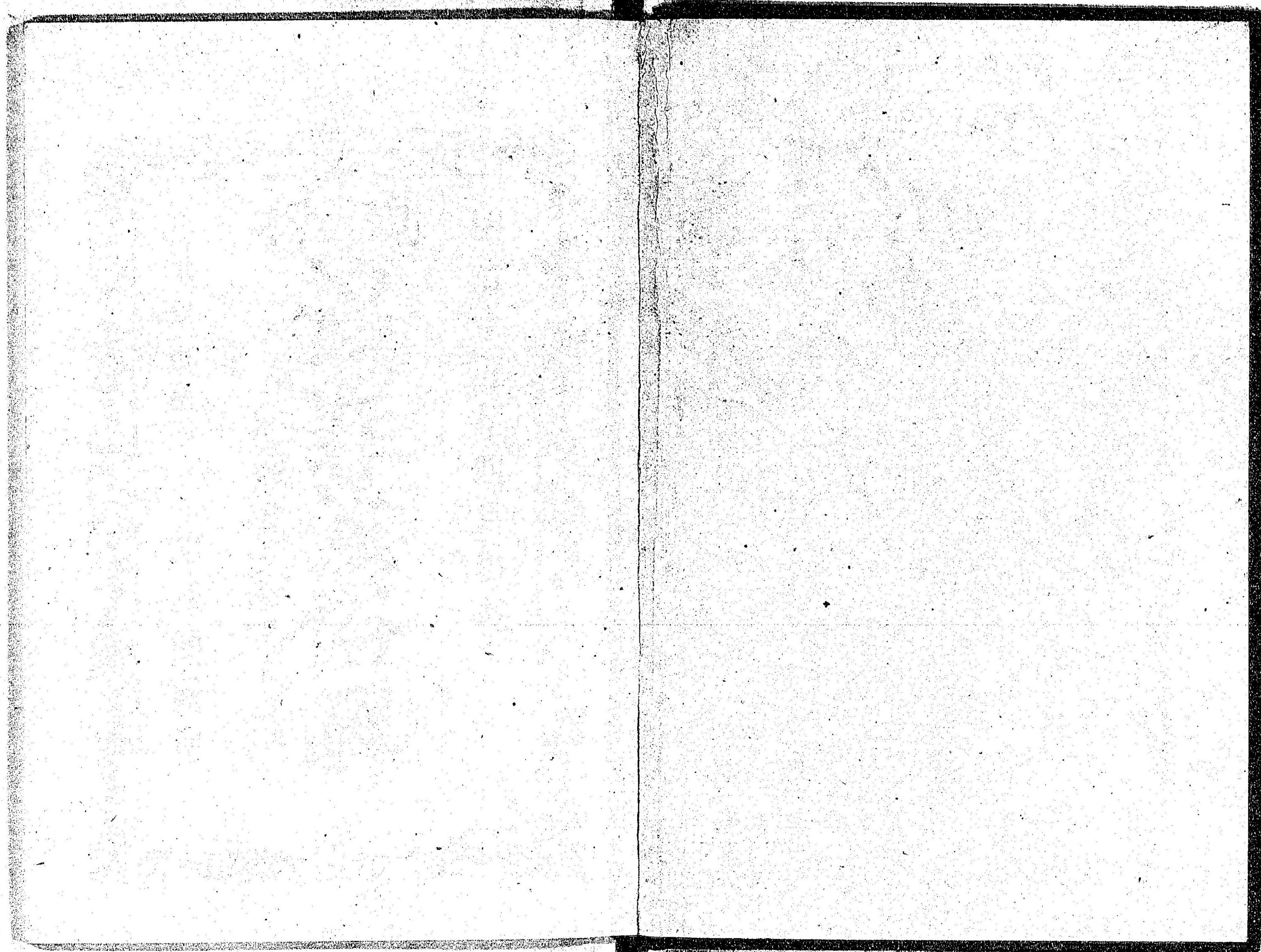
現行  
治罪法俗解

附參考書諸布告達

東京書肆

錦森閣發兌







持16  
357

明治十五年四月出版

現  
行  
治罪法俗解

附參考書諸布告達

東京書肆

錦森閣發兌



治罪法目錄

第一編 總則

第二編 刑事裁判所ノ構成及ヒ權限

第一章 通則

第二章 違警罪裁判所

第三章 輕罪裁判所

第四章 控訴裁判所

第五章 重罪裁判所

第六章 大審院

第七章 高等法院

第三編 犯罪ノ捜査起訴及ヒ豫審

第一章 捜査

第一節 告訴及ヒ告發

一	丁	十	丁	全	丁	十	丁	十五	丁	十六	丁	十九	丁	二十一	丁	二十二	丁	二十四	丁	二十六	丁	全	丁	全	丁
---	---	---	---	---	---	---	---	----	---	----	---	----	---	-----	---	-----	---	-----	---	-----	---	---	---	---	---



第二章	現行犯罪	二十九丁
第二節	起訴	三十一丁
第一節	檢察官ノ起訴	全丁
第二節	民事原告人ノ起訴	三十二丁
第三章	豫審	三十三丁
第一節	令狀	三十五丁
第二節	密室監禁	四十三丁
第三節	證據	四十四丁
第四節	被告人ノ訊問及ヒ對質	四十六丁
第五節	檢證及ヒ物件差押	四十八丁
第六節	證人訊問	五十二丁
第七節	鑑定	五十九丁
第八節	現行犯ノ豫審	六十二丁

第九節	保釋	六十四丁
第十節	豫審終結	六十七丁
第四章	豫審上訴	七十二丁
第四編	公判	八十一丁
第一章	通則	全丁
第二章	違警罪公判	百一丁
第三章	輕罪公判	百九丁
第四章	重罪公判	百十六丁
第五編	大審院ノ職務	百二十八丁
第一章	上告	全丁
第二章	再審ノ訴	百三十七丁
第三章	裁判管轄ヲ定ムルノ訴	百四十一丁
第四章	公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴	百四十二丁



第六編 裁判執行復権及ヒ特赦

第一章 裁判執行

第二章 復権

第三章 特赦

四  
百四十四丁

全 丁

百四十七丁

百四十九丁

治罪法俗解

第一編 總則

第一條 公訴ハ犯罪ヲ證明シ刑ヲ適用スルヲ目的トスル者ニシテ

法律ニ定メタル區別ニ從ヒ檢察官之ヲ行フ

第二條 私訴ハ犯罪ニ因リ生シタル損害ノ賠償贖物ノ返還ヲ目的ト

スル者ニシテ民法ニ從ヒ被害者ニ屬ス

第三條 公訴ハ被害者ノ告訴ヲ待テ起ル者ニ非ス又告訴私訴ノ棄權

ニ因テ消滅スル者ニ非ス但法律ニ於テ特ニ定メタル場合ハ此限ニ

在ラス

第四條 私訴ハ其金額ノ多寡ニ拘ハラズ公訴ニ附帶シテ刑事裁判所

ニ之ヲ爲スヲ得但法律ニ於テ其裁判所ニ私訴ヲ爲スヲ許サ、

ル場合ハ此限ニ在ラス

又私訴ハ別ニ民事裁判所ニ之ヲ爲スヲ得



第五條 公訴私訴ノ裁判ハ管轄裁判所ニ於テ現ニ施行スル法律ニ定メタル訴訟手續ニ從ヒ之ヲ爲ス可シ

第六條 刑事裁判所又ハ刑事裁判所ト民事裁判所トニ於テ公訴私訴並起ル時ハ公訴ノ裁判ニ先テ私訴ノ裁判ヲ爲ス可カラズ若シ賠償返還ノ旨渡アリタル後刑ノ旨渡アリタル時ハ共ニ其效ナカル可シ

第七條 民事裁判所ニ私訴ヲ爲シタル時ハ檢察官ノ起訴アルニ非サレハ願下ヲ爲シ更ニ刑事裁判所ニ其訴ヲ爲スコトヲ得

第八條 被告人免訴又ハ無罪ノ旨渡ヲ受ケタリト雖モ民法ニ從ヒ被害者ニリ賠償返還ヲ要ムルノ妨礙ト爲ルコトナカル可シ

第九條 公訴ヲ爲スノ權ハ左ノ條件ニ因テ消滅ス  
一 被告人ノ死去

二 告訴ヲ待テ受理ス可キ事件ニ付テハ被害者ノ棄權又ハ私和  
三 確定裁判  
四 犯罪ノ後頒布シタル法律ニ因リ其刑ノ廢止  
五 大赦  
六 期滿免除

第十條 私訴ヲ爲スノ權ハ左ノ條件ニ因テ消滅ス  
一 被害者ノ棄權又ハ私和  
二 確定裁判  
三 期滿免除

第十一條 公訴期滿免除ノ期限左ノ如シ  
一 違警罪ハ六月  
二 輕罪ハ三年  
三 重罪ハ十年



第十二條 私訴期滿免除ノ期限ハ被害者無能ナル時又ハ民事裁判所ニ其訴ヲ爲シタル時ト雖モ公訴期滿免除ノ期限ト同一ナリトス  
 公訴ニ付キ既ニ刑ノ言渡アリタル時ハ民法ニ定メタル期滿免除ノ例ニ從フ

第十三條 公訴私訴期滿免除ノ期限ハ犯罪ノ日ヨリ起算ス但繼續犯罪ニ付テハ其最終ノ日ヨリ起算ス

第十四條 期滿免除ハ刑事裁判所ニ於テ檢察官若クハ民事原告人ヨリ起訴ノ手續ヲ爲シ又豫審若クハ公判ノ手續アリタルニ因リ其期限ノ經過ヲ中斷ス其未タ發覺セサル正犯從犯及ヒ民事擔當人ニ付テモ亦同シ

期滿免除ノ期限ノ經過ヲ中斷シタル時ハ起訴豫審又ハ公判ノ手續ヲ止メタル日ヨリ更ニ其期限ヲ起算ス但前後ノ日數ヲ通算シテ第十一條ニ定メタル期限ノ二倍ヲ超過ス可カラズ

第十五條 起訴豫審又ハ公判ノ手續其規則ニ背キタルニ因リ無効ニ屬スル時ハ期滿免除ノ期限ノ經過ヲ中斷スルノ効ナカル可シ但裁判官ノ管轄違ナルニ因リ其手續ノ無効ニ屬スル時ハ此限ニ在ラズ

第十六條 被告ノ言渡又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタル場合ニ於テ其訴訟ノ原由告訴人告訴人又ハ民事原告人ノ惡意若クハ重キ過失ニ出テタル時ハ是等ノ者ニ對シ損害ノ價ヲ要ムルヲ得

被告ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時雖モ告訴人告訴人又ハ民事原告人ヨリ惡意若クハ重キ過失ニ因リ其犯罪ニ付キ過實ノ申立ヲ爲シタル時亦同シ

民事原告人豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ上訴ヲ爲シ敗訴シタル時ハ被告ノ其上訴ニ因リ生シタル損害ノ價ヲ要ムルヲ得  
 要價ノ訴ハ本案ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ其裁判所ニ之ヲ爲ス可ク得



第十七條 被告ノ無罪ノ旨渡シ受ケタリト雖モ裁判官檢察官書記又ハ司法警察官ニ對シ要價ノ訴ヲ爲スヲ得ズ但是等ノ官吏被告ハ對シ故意ヲ以テ損害ヲ加ヘ又ハ刑法ニ定メタル罪ヲ犯シタル場合ハ此限ニ在ラス

第十八條 此法律ニ於テ期限ヲ計算スルニ時々以テスル者ハ即時ヨリ起算シ日ヲ以テスル者ハ初日ヲ算入セス若シ最終ノ日休暇ニ當ル時ハ期限ニ算入ス可カラズ但期滿免除ノ期限ハ此限ニ在ラス一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テ一月ト稱スルハ三十日ヲ以テシ一年ト稱スルハ曆ニ從フ

第十九條 此法律ニ定メタル期限ハ陸路八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ加フ八里ニ滿サル者ト雖モ三里以上ナル時亦同シ島地又ハ外國トノ路程ノ猶豫ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第二十條 此法律ニ於テ訴訟ヲ爲スニ付キ定メタル期限ヲ經過シタル時ハ特別ノ場合ヲ除クノ外其權ヲ失フ可シ

第二十一條 訴訟關係人ハ裁判所々在ノ地ニ住セサル時ハ其地ニ假住所ヲ定メ書記局ニ雇置ク可シ否ラサル時ハ書類ノ送達ナシト雖モ異議ヲ申立ルヲ得ス

第二十二條 此法律ニ於テ訴訟關係人ニ書類ヲ送達スルニ付キ別ニ規則アラサル時ハ書記其送達書ヲ作り書記局所屬ノ使丁ヲシテ之ヲ送達セシム

若シ書類ノ送達ヲ受ケ可キ者裁判所ノ管轄地外ニ在ル時ハ其地ノ裁判所ノ書記ニ送達ノ事ヲ囑託ス可シ

第二十三條 送達書ハ一通ヲ作り其一通ヲ本人ニ渡ス可シ本人ニ渡スコトヲ得サル時ハ其住所ニ於テ同居ノ親屬又ハ雇人ニ渡ス可シ

送達人ハ之ヲ受取リタル者ヲシテ其三通ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ



同居ノ親屬又ハ雇人ニ書類ヲ渡スヲ得ス若クハ是等ノ者之ヲ受  
取ルヲ肯セサル時ハ其地ノ戸長ニ渡置キ戸長ハ其書類ニ認印シ  
速ニ本人ニ送達スルノ處分ヲ爲ス可シ

送達人ハ書類ヲ受取リタル者ノ氏名場所及ヒ日時ヲ其二通ニ記載  
ス可シ

本條ノ規則ニ背キタル時ハ書類送達ノ効ナカル可シ  
送達人ハ其一通ヲ書記局ニ還納シ書記局ニ於テハ送達ノ證トシテ  
之ヲ保存ス可シ

第二十四條 休暇ノ日及ヒ日出前日没後ハ書類ノ送達ヲ爲ス可カラ  
ズ此規則ニ背キタル時ハ其送達ノ効ナカル可シ但本人承諾シテ其  
送達ヲ受ケタル時ハ此限ニ在ラス

第二十五條 官吏ノ作ル可キ書類ハ其所屬官署ノ印ヲ用ヒ年月日及  
ヒ場所ヲ記載シテ署名捺印シ毎葉ニ契印ス可シ若シ官署ノ印ヲ用

フルト能ハサル場合ニ於テハ其事由ヲ記載ス可シ此規則ニ背キタ  
ル時ハ其書類ノ効ナカル可シ  
官吏ニ非サル者ノ作ル可キ書類ハ本人自ラ署名捺印ス可シ若シ  
署名捺印スルト能ハサル時ハ官吏ノ面前ニ於テ作リタル場合ヲ除

クノ外立會人代署シ其事由ヲ記載ス可シ

第二十六條 官吏其他何人ニ限ラズ訴訟ニ關スル書類ノ正本又ハ謄  
本ヲ作ルニ付キ文字ヲ改竄ス可カラズ若シ插入削除及ヒ外欄ヲ記

入アル時ハ之ニ認印ス可シ文字ヲ削除スル時ハ之ヲ讀得ヘキ爲メ  
字體ヲ存シ其數ヲ記載ス可シ其規則ニ背キタル時ハ其變更増減ノ  
効ナカル可シ

第二十七條 此法律ニ於テ定メタル豫審又ハ公判ニ付テノ規則ハ頒  
布以前ニ係ル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス  
頒布以前ニ爲シタル訴訟手續當時ノ法律ニ背カサル時ハ其効アリ



第二十八條 此法律ハ將來頒布ス可キ別段ノ法律ニ於テ豫審又ハ公判ノ手續ヲ定メタル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス但其法律ニ抵觸スル規

則ハ此限ニ在ラス  
從前頒布シタル別段ノ法律ニ於テ豫審又ハ公判ノ手續ヲ定メタル犯罪ニ付テハ前項ノ例ニ在ラス

第二十九條 此法律ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ處分ス可キ者ニ適用スルヲ得ス

第三十條 此法律ニ於テ親屬ト稱スルハ刑法第百十四條第百十五條ノ例ニ從フ

第二編 刑事裁判所ノ構成及ヒ權限  
第一章 通則  
第三十一條 通常刑事ノ裁判權ハ民事ノ裁判權ト同一ノ裁判所ニ屬

第三十二條 裁判所ノ位置及ヒ管轄ノ區劃ハ司法卿ノ奏請ニ因リ上裁ヲ以テ之ヲ定ム

第三十三條 裁判所ニハ檢察官一名又ハ數名ヲ置ク

第三十四條 刑事ニ付キ檢察官ノ職務左ノ如シ  
一 犯罪ヲ捜査ス

二 犯罪ニ付キ取調ノ處分及ヒ法律ノ適用ヲ裁判官ニ請求ス

三 裁判所ノ命令及ヒ官渡ヲ執行ヲ指揮ス

四 裁判所ニ於テ公益ヲ保護ス

第三十五條 檢察官一名ハ公廷ニ立會フ可シ  
第三十六條 裁判所ニハ書記一名又ハ數名ヲ置ク  
第三十七條 書記ハ豫審及ヒ公判ニ立會ヒ調書公判始末書其他訴訟ニ關スル一切ノ書類ヲ作ル可シ



又裁判官渡書其他一切ノ書類ヲ保存ス可シ

第三十八條

犯罪ノ種類ニ因リ裁判管轄ヲ定ムルヲ左ノ如シ

一 違警罪ハ違警罪裁判所

二 輕罪ハ輕罪裁判所

三 重罪ハ重罪裁判所

重罪及ヒ輕罪又ハ輕罪及ヒ違警罪ニ付キ同時ニ同一ノ被告人ニ對シテ訴アリタル時ハ附帶ノ犯罪ニ非スト雖モ上等ノ裁判所併セテ之ヲ管轄ス

第三十九條

左ノ場合ニ於テハ附帶ノ犯罪ナリトス

一 同一ノ場所ニ於テ同時ニ一人又ハ數人ニテ數罪ヲ犯シタル時

二 數人通謀シテ日時又ハ場所ヲ異ニシテ數罪ヲ犯シタル時

三 自己又ハ他人ノ犯罪ヲ容易ニスル爲メ又ハ其罪ヲ免カルハ爲メ他ノ罪ヲ犯シタル時

第四十條

同等ノ裁判所ニ於テハ犯罪ノ地ノ裁判所ヲ以テ豫審及ヒ公判ノ管轄ナリトス

犯罪ノ地分明ナラサル時ハ被告人逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第四十一條

數箇ノ裁判所ノ管轄地内ニ於テ同時ニ又ハ繼續シテ一箇ノ罪ヲ犯シタル時ハ其中ニテ被告人逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

數罪俱發ノ場合ニ於テモ亦同シ

第四十二條

犯罪ノ地ニ非サル裁判所ノ管轄地内ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ最近ノ管轄裁判所ニ送致ス可シ

令狀ヲ以テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ其令狀ヲ發シタル裁判所ニ送致ス可シ

第四十三條

數箇ノ裁判所ノ管轄ナル場合ニ於テ被告人ヲ逮捕スル



一能ハヌ若クハ法律上逮捕スルコトヲ許サ、ル時ハ其中ニテ最初豫  
審又ハ公判ニ着手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第四十四條

從犯ハ正犯ヲ管轄スル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

數箇ノ裁判所ノ管轄ニ屬スル正犯數名アル時ハ其中ニテ最初豫審

又ハ公判ニ着手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

高等法院及ヒ陸海軍裁判所ノ管轄ニ付キ法律ニ於テ特ニ定メタル

場合ハ本條ノ例ニ在ラス

第四十五條

外國ニ在テ犯シタル罪日本國ノ法律ニ依リ處斷ス可キ

者ニシテ内地ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ逮捕ノ地ノ裁判所ヲ

以テ其管轄ナリトス又外國ヨリ送致シタル時ハ送致ノ地ノ裁判所

ヲ以テ其管轄ナリトス

關席裁判ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ被告人最終住所ノ地ノ裁判所ヲ

以テ其管轄ナリトス又其住所分明ナラサル時ハ裁判管轄ヲ定ムルノ

訴ヲ爲ス可シ

第四十六條

商船内ノ犯罪ニ付テノ管轄及ヒ訴訟手續ハ別ニ法律ヲ

以テ之ヲ定ム

第四十七條

豫審ヲ爲シタル裁判官ハ其公判ニ干預ス可カラズ前ニ

豫審又ハ公判ヲ爲シタル裁判官ハ哀訴及ヒ關席裁判ニ對スル故障

ヲ除クノ外其上訴ノ裁判ニ干預ス可カラズ此規則ニ背キタル時ハ

其旨渡ノ効ナカル可シ

第四十八條

裁判所ハ訴ヲ受ケタル事件ニ付キ自ラ其管轄ナリヤ否

ヲ判決スルノ權アリ其判決ニ付テハ本案ノ事件終審ナル可キ場合

ト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ檢察官其他訴訟關係人ヨリ上訴スルコトヲ

得

第二章 違警罪裁判所

第四十九條

治安裁判所ハ違警罪裁判所トシテ其管轄地内ニ於テ犯



シタル違警罪ヲ裁判ス

第五十條 違警罪裁判所判事ノ職務ハ治安裁判所判事之ヲ行フ  
判事差支アル時ハ判事補其職務ヲ行フ

第五十一條 違警罪裁判所檢察官ノ職務ハ其裁判所々在ノ地ノ警部  
之ヲ行フ

第五十二條 違警罪裁判所檢察官ハ毎月未決既決ノ事件表ヲ作り輕  
罪裁判所檢察官ニ差出ス可シ

事件表ニハ違警罪裁判所判事認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可  
シ

第五十三條 違警罪裁判所書記ノ職務ハ治安裁判所書記之ヲ行フ  
第三章 輕罪裁判所

第五十四條 始審裁判所ハ輕罪裁判所トシテ其管轄地内ニ於テ犯シ  
タル輕罪ヲ裁判ス

又重罪及ヒ輕罪ノ豫審ヲ行フ

又其管轄地内ノ違警罪裁判所ノ始審ノ裁判ニ對スル控訴ヲ裁判ス  
第五十五條 輕罪裁判所判事ノ職務ハ裁判所長ヨリ始審裁判所判事  
一名又ハ數名ニ順次滿一年間之ヲ命ス

又滿一年間更ニ其職務ヲ繼續セシムルヲ得

第五十六條 豫審判事ノ職務ハ司法卿ヨリ始審裁判所判事一名又ハ  
數名ニ滿一年間之ヲ命ス

又滿一年以上其職務ヲ繼續ス可キヲ命スルヲ得

第五十七條 判事差支アル時ハ其他ノ判事又ハ判事補其職務ヲ行フ  
判事補ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒ意見ヲ述ルヲ得

第五十八條 輕罪裁判所檢察官ノ職務ハ始審裁判所檢察官又ハ其指名  
シタル檢事補之ヲ行フ

第五十九條 輕罪裁判所書記ノ職務ハ始審裁判所書記之ヲ行フ



第六十條 東京警視本署長及ヒ府縣長官ハ各其管轄地内ニ於テ司法警察官トシテ犯罪ヲ捜査スルニ付キ檢事ト同一ノ權ヲ有ス但東京府長官ハ此限ニ在ラス

左ニ記載シタル官吏ハ檢事ノ補佐トシテ其指揮ヲ受ケ第三編ニ定メタル規則ニ從ヒ司法警察官トシテ犯罪ヲ捜査ス可シ

一 警視警部

二 區長部長

三 治安判事

四 警部ノ在ラサル地ノ局長

第六十一條 司法警察官檢察官又ハ裁判官ハ他ノ司法警察官檢察官又ハ裁判官ヨリ犯罪取調ノ爲メ其管轄地内ニ於テ證據其他事實ヲ考ト爲ル可キ事物ヲ集取ス可キノ囑託ヲ受クルコトアル可シ

第六十二條 檢事ハ二月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作

リ控訴裁判所檢事長ニ差出ス可シ

又違警罪裁判所檢察官ヨリ差出シタル事件表ヲ同時ニ檢事長ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

事件表ニハ裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第四章 控訴裁判所

第六十三條 控訴裁判所ニ刑事局ヲ置キ輕罪裁判所ノ始審ノ裁判ニ對スル控訴ヲ裁判ス但其裁判ハ判事三名以上ニア之ヲ爲ス可シ

第六十四條 刑事局判事ノ職務ハ裁判所長ヨリ其裁判所判事數名ニ順次滿一年間之ヲ命ス

又滿一年間更ニ其職務ヲ繼續セシムルコトヲ得

第六十五條 刑事局判事差支アル時ハ裁判所長ヨリ民事局判事ヲシテ其職務ヲ行ハシム

裁判所長ハ何時ニテモ裁判長ト爲ルコトヲ得



第六十六條 刑事局檢察官ノ職務ハ其裁判所檢察長又ハ其指名シタル  
ル 檢事之ヲ行フ

第六十七條 檢事長ハ其裁判所ノ管轄地内ニ於テ輕罪裁判所檢事ニ  
屬スル司法警察及ヒ起訴ノ職務ヲ行ヒ又ハ其所屬ノ檢事ヲシテ之  
ヲ行ハシムルコトヲ得

又起訴及ヒ其他ノ職務ニ付キ其管轄地内ノ檢察官ニ告達スルコト  
ル可シ

檢事長ハ其管轄地内ノ檢察官及ヒ司法警察官ヲ監督ス

第六十八條 檢事長ハ三月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ  
作り司法卿ニ差出ス可シ  
又輕罪裁判所檢事ヨリ差出シタル事件表ヲ同時ニ司法卿ニ差出シ  
且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ  
事件表ニハ裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第六十九條 刑事局書記ノ職務ハ其裁判所書記之ヲ行フ

第五章 重罪裁判所

第七十條 重罪裁判所ハ其管轄地内ニ於テ犯シタル重罪ヲ裁判ス

第七十一條 重罪裁判所ハ三月毎ニ之ヲ開ク

若シ事件夥多ナル時ハ控訴裁判所長及ヒ檢事長ヨリ司法卿ニ具申  
シ其許可ヲ得テ臨時開廳スルコトヲ得

第七十二條 重罪裁判所ハ控訴裁判所又ハ始審裁判所ニ於テ之ヲ開

第七十三條 重罪裁判所ハ左ノ職員ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

一 裁判所長一名但控訴裁判所長ヨリ其裁判所判事ニテ之ヲ命ス  
二 陪席判事四名但控訴裁判所ニ於テ開ク時ハ裁判所長ヨリ其裁判

所判事ニテ之ヲ命シ始審裁判所ニ於テ開ク時ハ其裁判所長及  
ヒ先任ノ判事ヲ以テ之ニ充ツ



第七十四條 重罪裁判所檢察官ノ職務ハ 控訴裁判所檢察官又ハ其指名シタル 檢事之ヲ行フ

始審裁判所ニ於テ開ク時ハ 檢事長ヨリ 始審裁判所 檢事ヲシテ 其職務ヲ行ハシムルヲ得

第七十五條 重罪裁判所書記ノ職務ハ 開廳ス可キ裁判所ノ書記之ヲ行フ

第七十六條 控訴裁判所 檢事長ハ 開廳ノ後 既決事件表ヲ作り 司法卿ニ差出ス可シ

事件表ニハ 控訴裁判所長認印シ 且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第六章 大審院  
第七十七條 大審院ニ 刑事局ヲ置キ 左ノ條件ヲ裁判ス  
一 上告  
二 再審ノ訴

三 裁判管轄ヲ定ムルノ訴  
四 公安又ハ嫌疑ノ爲メ 裁判管轄ヲ移スノ訴

第七十八條 刑事局ニ於テハ 判事五名以上ニ非ザレハ 裁判ヲ爲ス可カラス

第七十九條 刑事局判事ノ職務ハ 司法卿ノ奏請ニ因リ 其院判事ニ之ヲ命ス

判事差支アル時ハ 民事局判事授任ノ順序ニ從ヒ 其職務ヲ行フ

第八十條 刑事局 檢察官ノ職務ハ 其院 檢事長又ハ 其指名シタル 檢事之ヲ行フ

第八十一條 刑事局書記ノ職務ハ 其院書記之ヲ行フ

第八十二條 檢事長ハ 三月毎ニ 豫審及ヒ 公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作り 司法卿ニ差出ス可シ

事件表ニハ 院長認印シ 且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ



第七章 高等法院

第八十三條 高等法院ニ於テハ刑法第二編第一章第二章ニ記載シタル重罪ヲ裁判ス

又皇族ノ犯シタル重罪及ヒ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ヲ裁判ス  
又勅任官ノ犯シタル重罪ヲ裁判ス

前二項ニ記載シタル者ノ正犯及ヒ從犯ハ身分ノ如何ヲ問ハス其院ニ於テ之ヲ裁判ス

第八十四條 高等法院ハ司法卿ノ奏請ニ因リ上裁ヲ以テ之ヲ開ク其裁判又可キ事件及ヒ開院ス可キ場所モ亦上裁ヲ以テ之ヲ定ム

第八十五條 高等法院ハ左ノ職員ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

一 裁判長一名 陪席裁判官六名 但元老院議官大審院判事中心ヨリ毎年豫メ上裁ヲ以テ之ヲ命ス

二 陪席裁判官二名 但前項ノ式ニ從ヒ之ヲ命ス

第八十六條 豫審判事ノ職務ハ上裁ヲ以テ大審院刑事局判事一名又ハ數名ニ之ヲ命ス

第八十七條 高等法院檢察官ノ職務ハ大審院檢察長又ハ司法卿ヨリ指名シタル檢事之ヲ行フ

第八十八條 高等法院書記ノ職務ハ大審院書記之ヲ行フ

第八十九條 高等法院ノ裁判ニ對シテハ上訴ヲ許サス但左ノ條件ニ於テハ其院ニ上訴スルヲ得

一 關席裁判アリタル場合ニ於テ故障

二 第四百三十六條ト同一ノ場合ニ於テ哀訴

三 第四百三十九條ト同一ノ場合ニ於テ再審ノ訴

第九十條 被告事件夥多ナル時又ハ再審ノ訴ヲ裁判ス可キ時ハ新ニ職員ヲ命スルヲアル可シ

第九十一條 高等法院ノ訴訟手續ハ通常ノ規則ニ從フ



第三編 犯罪ノ捜査起訴及ヒ豫審

第一章 捜査

第九十二條 檢察官ハ後ニ記載シタル告訴告發現行犯其他ノ原由ニ因リ犯罪アルヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタル時ハ其證據及ヒ犯人ヲ捜査シ第百七條以下ノ規則ニ從ヒ起訴ノ手續ヲ爲ス可シ

第一節 告訴及ヒ告發

第九十三條 何人ニ限ラズ重罪輕罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ犯罪ノ地若クハ被告人所在ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ告訴スルコトヲ得

豫審判事告訴ヲ受ケタル時ハ第百十四條以下ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

檢事告訴ヲ受ケタル時ハ第百七條ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ  
司法警察官告訴ヲ受ケタル時ハ速ニ其書類ヲ檢事ニ送致ス可シ

違警罪ニ付テハ犯罪ノ地ノ違警罪裁判所檢察官又ハ司法警察官ニ告訴スルヲ得其告訴ヲ受ケタル司法警察官ハ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ移ス可シ

第九十四條 告訴人ハ成ル可ク其證據及ヒ事實參考ト成ル可キヲ申立ツ可シ

又告訴人ハ第百十條以下ノ規則ニ從ヒ民事原告人ト爲ルヲ得

第九十五條 告訴ハ告訴人ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ  
又告訴ヲ口述ヲ以テ之ヲ爲ス可シ得其告訴ヲ受ケタル官吏ハ調書ヲ作リ告訴人ニ之ヲ讀聞カセ共ニ署名捺印ス可シ若シ告訴人署名捺印スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ  
告訴人ニハ告訴ヲ受ケタルノ證書ヲ渡ス可シ

第九十六條 官吏其職務ヲ行フニ因リ重罪輕罪アルヲ認知シ又ハ



重罪輕罪アリト思料シタル時ハ速ニ其職務ヲ行フ地ノ檢事ニ告發ス可シ

告發ハ官吏ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲シ成ル可ク證據及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ添フ可シ  
違警罪ニ付テハ違警罪裁判所檢察官ニ告發ス可シ

第九十七條

何人ニ限ラズ重罪輕罪アルコトヲ認知シ又ハ重罪輕罪アリト思料シタル時ハ第九十四條第九十五條ノ規則ニ從ヒ其所在地若クハ犯罪ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ告發スルコトヲ得

第九十八條

告發告發ハ代人ニ委任シテ之ヲ爲スコトヲ得但第九十六條ノ場合ハ此限ニ在ラス

第九十九條

無能力者ノ告訴ハ法律ニ定メタル代人之ヲ爲スモ其効アリトス  
告訴告發ハ其願下ヲ爲シ又ハ其申立ヲ變更スルコトヲ得

此場合ト雖モ第十六條ノ規則ニ從ヒ被告人ヨリ要償ノ訴ヲ受クルコトアル可シ

第二節 現行犯罪

第一百條 現行犯罪トハ現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際ニ發覺シタル罪ヲ謂フ

第一百一條

重罪輕罪ニ付キ左ノ場合ハ現行犯ニ准ス

- 一 犯人トシテ一人又ハ數人ニ追呼セラル、時
- 二 兇器贓物其他犯人ト思料ス可キ物件ヲ携帶シタル時
- 三 家宅内ニ於テ犯シタル罪ヲ檢證スル爲メ又ハ其犯人ト思料ス可キ者ヲ逮捕スル爲メ戸主ヨリ官吏ニ其處分ヲ求メタル時

第一百二條

司法警察官及ヒ巡查其職務ヲ行フニ當リ重罪輕罪ノ現行犯アルコトヲ知りタル時ハ令狀又ハ命令ヲ待タズシテ被告人ヲ逮捕ス可シ



違警罪ノ現行犯アルヲ知リタル時ハ被告人ノ氏名住所ヲ問ヒ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ告發ス可シ其氏名住所分明ナラス又ハ逃亡ノ恐アル者ハ違警罪裁判所ニ引致スルヲ得

第三百三條 巡査被告人ヲ逮捕シタル時ハ速ニ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ

其被告人ヲ受取リタル司法警察官ハ逮捕及ヒ告發ニ付テノ調書ヲ作ル可シ

第四百條 司法警察官被告人ヲ逮捕シ又ハ之ヲ受取リタル時ハ假ニ被告人ノ訊問及ヒ檢證處分ヲ爲ス可シ

第四百五條 何人ニ限ラズ重罪輕罪ノ現行犯アル場合ニ於テハ直チニ被告人ヲ逮捕スルヲ得

第四百六條 前條ノ場合ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル者ハ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ若シ引致スルヲ得サル時ハ自己ノ氏名職業住所

及ヒ其逮捕ノ事由ヲ陳述シ假ニ之ヲ巡査ニ引渡スヲ得  
被告人ヲ巡査ニ引渡シタル時ハ速ニ告訴又ハ告發ヲ爲ス可シ  
被告人又ハ巡査ハ逮捕ヲ爲シタル者ニ對シ共ニ官署ニ至ルヲ求ムルヲ得但逮捕ヲ爲シタル者ハ正當ノ事由アルニ非サレハ其求ヲ拒ムヲ得

第二章 起訴

第一節 檢察官ノ起訴

第一百七條 檢事犯罪ノ捜査ヲ終リタル時ハ左ノ手續ヲ爲ス可シ

一 重罪ト思料シタル事件ニ付テハ豫審判事ニ豫審ヲ求ム可シ

二 輕罪ト思料シタル事件ニ付テハ其輕重難易ニ從ヒ豫審ヲ求メ又ハ直チニ輕罪裁判所ニ其訴ヲ爲ス可シ

三 違警罪ト思料シタル事件ニ付テハ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ

違警罪裁判所檢察官ニ送致ス可シ



四被告人ノ身分犯罪ノ種類又ハ場所ニ因リ其管轄ニ屬セサル者ト  
思料シタル事件ニ付テハ之ヲ管轄裁判所檢察官ニ送致ス可シ  
被告事件罪ト爲ラス又ハ公訴受理ス可カラサル者ト思料シタル時  
ハ起訴ノ手續ヲ爲ス可カラス

第八條 前條ノ場合ニ於テ被告事件告訴ニ係ル時ハ檢事ヨリ其處  
分ヲ被害者ニ通知ス可シ

第九條 檢事豫審ヲ承ムル時ハ證據及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物  
ヲ送致シ且臨檢ス可キ場所逮捕ス可キ人名及ヒ原被ノ證人ト爲ル  
可キ者ヲ指示ス可シ

第二節 民事原告人ノ起訴

第十條 重罪輕罪ノ被害者公訴ニ附帶シテ私訴ヲ爲サントスル時  
ハ告訴ト共ニ之ヲ申立テ又ハ告訴ヲ爲シタル後其旨ヲ豫審判事ニ  
申立ツ可シ

豫審判事直チニ被害者ヨリ民事原告人ト爲ル可キノ申立テ受ケタ  
ル時ハ檢察官ノ起訴ナシト雖モ公訴私訴ヲ併セテ受理シタル者ト  
ス

豫審判事ハ何ノ場合ニ於テモ直チニ被害者ヨリ民事原告人ト爲

ル可キノ申立テ受ケタル時ハ其旨ヲ檢事ニ通知ス可シ

第十一條 被害者ハ公訴ノ本案ニ付キ始審終審ノ裁判言渡アルマ

テ何時ニテモ私訴ヲ爲シ若クハ其要ムル所ヲ變更スルヲ得

又私訴ノ願下ヲ爲シタル後更ニ其申立ヲ爲シ若クハ其要ムル所ヲ

變更スルヲ得

第十二條 被害者ハ代人ヲ委任シテ私訴ヲ爲シ又ハ其願下若クハ

棄權ヲ爲スヲ得

被害者無能力ナル時ハ法律ニ定メタル代人之ヲ爲ス可シ

第三章 豫審



第百十三條

現行ノ重罪輕罪ヲ除クノ外豫審判事ハ前章ニ定メタル規則ニ從ヒ檢事又ハ民事原告人ノ請求アルニ非サルハ豫審ニ取掛ルヲ得ス此規則ニ背キタル時ハ其請求ヨリ以前ニ係ル手續ノ效ナカル可シ

第百十四條

豫審判事ハ重罪輕罪ニ付キ直チニ告訴又ハ告發ヲ受ケタル時ハ召喚狀ヲ以テ被告人ヲ呼出シ之ヲ訊問スルヲ得若シ引續キ取調ヲ爲ス可キ者ト思料シタル時ハ其事件ヲ檢事ニ送致ス可シ

第百十五條

豫審判事ハ告訴告發ノ事件急速ヲ要スル時ハ直チニ被告人ニ對シ勾引狀ヲ發シ又ハ訊問シタル後勾留狀ヲ發スルヲ得此場合ニ於テハ速ニ其旨ヲ檢事ニ通知シ且證據及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ送致ス可シ若シ其通知ヲ爲シタルヨリ一日内ニ檢事起訴ヲ爲ササル時ハ速ニ

被告人ヲ放免ス可シ但後日起訴ヲ爲スノ妨礙ト爲ルヲ得

第百十六條

被告人所在ノ地ノ豫審判事直チニ告訴告發ヲ受ケ又ハ檢事ヨリ其送致ヲ受ケ被告事件急速ヲ要スル時ハ通常ノ規則ニ從ヒ被告人ノ訊問又ハ檢證處分ヲ爲シタル後證據及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ犯罪ノ地ノ豫審判事ニ送致ス可シ若シ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ勾留狀ヲ以テ被告人ヲ送致スルヲ得

第百十七條

檢事ハ豫審中何時ニテモ豫審判事ニ請求シテ訴訟書類ヲ檢閱スルヲ得但二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ又必要ナリトスル處分ニ付キ臨時其請求ヲ爲スヲ得

第一節 令狀

第百十八條

豫審判事ハ檢事又ハ民事原告人ノ起訴ニ因リ重罪輕罪ノ事件ヲ受理シタル時ハ被告人ニ對シ先ツ召喚狀ヲ發ス可シ但召



喚状ノ送達ト被告人出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ  
召喚状ニ因リ出廷シタル被告人ハ即時ニ之ヲ訊問ス可シ又遅クト  
モ出廷ノ日ヲ過クルコト得ス

第一百十九條 豫審判事ハ召喚状ヲ受ク可キ被告人其管轄地内ニ住セ  
サル時ハ訊問ス可キ條件ヲ明示シテ被告人所在ノ地ノ豫審判事ニ  
其處分ヲ囑託スルコト得

第一百二十條 豫審判事ハ召喚状ヲ受ケタル被告人其日時ニ出廷セザ  
ル時ハ勾引状ヲ發スルコト得

第一百二十一條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ直チニ勾引状ヲ發スルコ  
ト得  
一被告人定マリタル住所アラサル時

二被告人罪證ヲ湮滅シ又ハ逃亡スルノ恐アル時

三被告人未遂罪又ハ脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂ケントスルノ恐

アル時

第一百二十二條 勾引状執行ノ命ヲ受ケタル者ハ其令状ヲ發シタル豫

審判事ニ被告人ヲ引致ス可シ

勾引状ヲ以テ引致シタル被告人ハ四十八時内ニ之ヲ訊問ス可シ若

シ其時間ヲ經過スル時ハ勾留状ヲ發スルニ非ザレハ當然之ヲ釋放

ス可シ

第一百二十三條 勾引状ヲ發シタル前被告人既ニ豫審判事ノ管轄地外

ニ在ル時ハ被告人ヨリ其所在ノ地ノ豫審判事ノ取調ヲ求ムルコトヲ

得其求ヲ受ケタル豫審判事ハ假ニ被告人ヲ勾留シ速ニ勾引状ヲ發

シタル豫審判事ニ其旨ヲ通知ス可シ

第一百二十四條 前條ノ場合ニ於テ勾引状ヲ發シタル豫審判事ハ被告

人ヲ勾留シタル豫審判事ニ訊問ノ條件ヲ明示シテ其處分ヲ囑託シ  
又ハ前ニ發シタル勾引状ヲ以テ被告人ヲ送致ス可キコトヲ請求ス可



其囑託ヲ受ケタル豫審判事ハ被告人ヲ訊問シタル後其旨ヲ勾引狀ニ發シタル豫審判事ニ通知シ其意見ヲ聽キ被告人ヲ放免シ又ハ前ニ發シタル勾引狀ヲ以テ管轄豫審判事ニ送致ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百二十五條

豫審判事ハ召喚狀又ハ勾引狀ヲ受ケタル被告人疾病其他正當ノ事由アリテ令狀ニ應ズル能ハサルコトヲ證明シタル時ハ被告人ノ所在ニ就テ之ヲ訊問スルコトヲ得若シ被告人其管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事ニ訊問ノ事ヲ囑託ス可シ

第二百二十六條

勾留狀ハ被告人逃亡シ又ハ第二百二十三條ノ場合ヲ除クノ外被告人ヲ訊問シタル後禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料スルニ非ザレハ之ヲ發スルコトヲ得ス  
豫審判事ハ勾留狀ヲ執行シタルヨリ十日ヲ過クル時

第二百二十七條

ハ之ヲ收監狀ニ換ヘ若クハ第二百十九條ノ規則ニ從ヒ被告人ヲ賣付ス可シ

第二百二十八條

收監狀ハ既ニ取掛リタル豫審ノ手續ヲ檢事ニ通知シ且其意見ヲ聽キタル後ニ非ザレハ之ヲ發スルコトヲ得ス

第二百二十九條

收監狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ  
一 被告事件ノ概要及ヒ加重減輕ノ摸樣アル時ハ其概要  
二 其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條  
三 檢察官ノ意見ヲ聽キタル十三

第三百十條

總令狀ニハ被告事件及ヒ被告人ノ氏名職業住所ヲ記載ス可シ但召喚狀ヲ除クノ外其氏名分明ナラサル時ハ容貌體格等ヲ明示ス可シ



又令狀ハ之ヲ發スルノ年月日時ヲ記載シ豫審判事及ヒ書記署名捺印ス可シ

勾引狀勾留狀收監狀ハ巡査サシテ之ヲ執行セシム

第三百三十一條 召喚狀ハ第三十三條ノ規則ニ從ヒ書記局所屬ノ使丁

チシテ被告人又ハ其住所ニ之ヲ送達セシム

第三百三十二條 勾引狀勾留狀收監狀ハ日本全國ニ於テ之ヲ執行ス但

時宜キ因リ正本數通ヲ作り巡査數人ニ分付スルヲ可シ

前項ノ令狀ヲ執行スルニハ被告人ニ正本ヲ示シ其賸本ヲ下付ス可

シ此場合ニ於テハ第二十三條第二項第四項ノ規則ニ從フ

第三百三十三條 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡査ハ被告人其家宅若クハ

他人ノ家宅ニ潛匿シタリト思料レタル時ハ其地ノ戸長又其差支

人ノ隣佑二名以上ノ立會ヲ求メ之ヲ搜索ス可シ

巡査ハ被告人ヲ發見シタルト否ト拘捕スルハ搜索調書ヲ作り立會

人ト共ニ署名捺印ス可シ

第三百三十四條 豫審判事ハ被告人他ノ管轄地内ニ潛匿シタルヲ知

リ又ハ潛匿シタリト思料レタル場合ニ於テ被告事件急速ヲ要スル

時ハ巡査ニ令狀ヲ帶行セシムルヲ得

巡査ハ被告人所在ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ令狀ヲ示

シテ即時ニ執行ヲ求ム可シ

第三百三十五條 豫審判事ハ被告人所在ノ地ヲ覺知スルヲ能ハサル時

ハ各控訴裁判所檢事長ニ被告人ノ人相書ヲ送致シ搜查及ヒ逮捕ヲ

爲メ可キヲ請求スルヲ得

請求ヲ受ケタル檢事長ハ其管轄地内ノ檢事ヲシテ搜查及ヒ逮捕ノ

處分ヲ爲サシム可シ

第三百三十六條 陸海軍在營ノ軍人軍屬ニ對シ令狀ヲ發シタル時ハ所



第四百一十條 局長官ニ令狀ヲ示ス可シ長官ハ已ムコトヲ得サル差支アルニ非サレバ本人ヲシテ速ニ令狀ニ應ジシム可シ其行軍ノ際亦同シ

第四百一十一條 勾留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ハ速ニ其令狀ニ記載シタル監倉ニ引致ス可シ若シ其監倉ニ引致スルコト能ハサル時ハ假令最近ノ監倉ニ引致スルコトヲ得

第四百一十二條 何レノ場合ニ於テモ監倉長ハ令狀ヲ檢閲シテ被告人ヲ受取り其證書ヲ渡ス可シ

第四百一十三條 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡査ハ之ヲ執行シタルコト又執行シタルコト能ハサル時ハ其事由ヲ令狀ノ正本ニ記載ス可シ

第四百一十四條 巡査ハ令狀執行ニ關スル書類ヲ書記局ニ差出シ書記ハ其受取證書ヲ渡ス可シ

第四百一十五條 勾留狀又ハ收監狀ヲ受ク可キ被告人既ニ監倉若クハ獄舎ニ在ル時ハ書記ヨリ之ヲ本人ニ送達シ其旨ヲ正本及ヒ謄本ニ記載ス可シ

記載ス可シ

第四百一十六條 密室監禁ノ場合ヲ除クノ外被告人ハ監獄則ニ從ヒ官吏ノ立會ニ依リ其親屬故舊又ハ代言人ニ接見スルコトヲ得

第四百一十七條 書籍其ノ書類ハ豫審判事ノ檢閲ヲ經タル後ニ非サレバ被告人ハ外人ト之ヲ授受スルコトヲ許サズ但豫審判事ハ其書類ヲ留置ク

第四百一十八條 豫審判事ハ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ニ非

第四百一十九條 豫審判事ハ豫審中何時ニテモ勾留狀又ハ收監狀ヲ取消ス

第四百二十條 豫審判事ハ豫審中何時ニテモ勾留狀又ハ收監狀ヲ取消ス

第四百二十一條 監倉ニハ刑法治罪法ニ備置キ被告人ノ請求ニ從ヒ之

第四百二十二條 監倉ニハ刑法治罪法ニ備置キ被告人ノ請求ニ從ヒ之

第四百二十三條 豫審判事ハ豫審中事實發見ノ爲メ必要ナリト思料シ



タル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ勾留狀若クハ收監狀ヲ受ケタル被告人ヲ密室ニ監禁スルノ言渡ヲ爲スヲ得

第四百四十四條

密室監禁ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ一名毎ニ之ヲ別室ニ置キ豫審判事ノ允許ヲ得ルニ非レバ他人ト接見シ又ハ書類貨幣其他ノ物品ヲ授受スルヲ許サズ

食物飲料藥餌其他監倉ヨリ給ス可キ物品ト雖モ監倉長ノ特ニ指名シタル者ヲ之ヲ給與セシム

第四百四十五條

密室監禁ハ十日ヲ超過ス可カラズ但十日毎ニ其言渡ヲ更改スルヲ得

言渡ヲ更改スル時ハ其事由ヲ裁判所長ニ報告ス可シ

豫審判事ハ十日間ニ少クトモ二度被告人ヲ訊問シ通常ノ規則ニ從ヒ調書ヲ作ル可シ

第三節 證據

第四百四十六條

法律ニ於テハ被害事件ノ標幟ニ因リ有罪ナルノ推測ヲ定ムルコトナシ

被告人ノ自狀官吏ノ檢證調書証據物件證人ノ陳述鑑定人ノ申立其他諸般ノ徵憑ハ裁判官ノ判定ニ任ス

第四百四十七條

豫審判事ハ檢察官民事原告人被告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル證據徵憑ヲ集取ス可シ

第四百四十八條

豫審判事臨檢家宅搜索物件差押又ハ被告人證人ノ訊問ヲ爲スコトハ書記ノ立會ヲ必要トス書記ハ調書ヲ作り豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

裁判所外ニ於テ急遽ノ際書記ノ立會ヲ得ルヲ能ハサル時ハ立會人

二名アルヲ要ス但監倉ニ就テ被告人ヲ訊問スル時ハ其監倉ノ官吏

一名ヲシテ立會ハシム可シ



前項ノ場合ニ於テハ豫審判事自ラ調書ヲ作り之ヲ讀開カセ立會人ト共ニ署名捺印ス可シ

書記又ハ立會人ナシテ爲シタル處分ハ其効ナカル可シ

第四節 被告人ノ訊問及ヒ對質

第四百十九條 豫審判事ハ先ツ被告人ヲ訊問ス可シ

但檢證ヲ爲シ又ハ證人ヲ訊問スルニ付キ急速ヲ要スル時ハ此限ニ在ラス

第四百十條

豫審判事ハ被告人ヲシテ其罪ヲ白狀セシムル爲メ恐嚇又ハ詐言ヲ用フ可カラズ

第四百十一條 書記ハ訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ被告人ニ之ヲ讀開カス可シ

豫審判事ハ被告人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ問ヒ署名捺印セシム可シ若シ署名捺印スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

書記ハ本條ノ式ヲ履行シタルヲ記載シ豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

第四百十二條 被告人其陳述ニ付キ變更増減ス可キヲ申立タル時ハ更ニ訊問ヲ爲シ前條ノ規則ニ從ヒ其訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ之ヲ讀開カセ署名捺印ス可シ

第四百十三條 被告人ハ陳述書ノ原本ヲ求ムルヲ得

第四百十四條 豫審判事ハ被告人ノ共犯ナルヲ人違ナキヲ其他事實ヲ發見ス可キ一切ノ模様ヲ證スル爲メ必要ナリトスル時ハ被告人ト他ノ被告人證人又ハ其他ノ者ト對質セシムルヲ得

第四百十五條 書記ハ對質人ノ陳述及ヒ對質ニ因リ生スル一切ノ事件ヲ錄取シ對質人ニ其對質ニ關スル部分ヲ讀開カス可シ

第四百十一條 第四百十二條ノ規則ハ對質ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第四百十六條 被告人又ハ對質人雙方ナル時ハ書面ヲ以テ問ヒ應ナル



時ハ書面ヲ以テ答ヘシム若シ聲者啞者文字ヲ知ラサル時ハ通事ヲ命ス可シ

被告人又ハ對質人國語ニ通ゼサル時亦同シ

第五十七條

通事ハ正實ニ通譯ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ

書記ハ通事ニ調書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム可シ

第九十二條第九十三條第二百條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第五節

第五十八條

檢證及ヒ物件差押豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ重罪

輕罪ノ犯所ニ臨ミ檢證ヲ爲ス可シ

第五十九條

豫審判事ハ犯罪ノ性質方法日時場所及ヒ被告人ノ人

進ナキヲ證明ス可キ模樣ニ付キ調書ヲ作ル可シ

又被告人ノ利益ト爲ル可キ模樣ヲモ記載ス可シ

第六十條

豫審判事ハ臨檢ノ場合ニ於テ發見シタル物件其出所及

ヒ模樣ニ因リ被告人ノ人違ナキ又ハ犯罪ノ模樣ヲ知ルニ足ル可

シト思料シタル時ハ之ヲ差押ヘテ認印ヲ爲シ目錄ヲ作ル可シ但其

物件ヲ監護シ又ハ遞送スルハ書記之ヲ擔任ス可シ

第六十一條

豫審判事ハ臨檢家宅搜索物件差押ニ付キ其日ニ處分

ヲ終ラサル時ハ場所ノ周圍ヲ閉鎖シ又ハ看守者ヲ置クヲ得

第六十二條

豫審判事ハ被告人ノ住所又ハ事實ヲ證明ス可キ物件

ヲ藏匿スルノ疑アル者ノ住所ニ臨檢スルヲ得

被告人又ハ物件ヲ藏匿スル者其住所ニ在ラサル時ハ同居ノ親屬若

シ其在ラサル時ハ戸長ノ立會アルヲ要ス

第六十三條

被告人ハ臨檢家宅搜索ノ處分ニ立會ヒ又ハ代人ヲシ



ア立會ハシムルヲ得

若シ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ自ラ立會フヲ得ス但豫審判事本人ノ立會ヲ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラス

民事原告人及ヒ其代人ハ前ニ記載シタル處分ニ立會フヲ得但豫審判事ハ其立會ノ爲メ豫審ヲ遅延ス可カラズ

第六十四條 家宅搜索ノ場合ニ於テ豫審判事ハ第六十條ノ規則ニ從ヒ物件ヲ差押フ可シ

物件ヲ差押ヘタル時ハ其目錄ノ原本ヲ立會人ニ渡ス可シ

第六十五條 豫審判事ハ被告人物件差押ノ處分ニ立會ヒタルト否トヲ問ハス其物件ヲ被告人ニ示シ辯解ヲ爲サシム可シ

第六十六條 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ證人ノ陳述ヲ聽クヲ必要ナリトスル時ハ書記ノ立會ニ依リ各別ニ之ヲ訊問ス可シ

第七十條以下ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第六十七條 豫審判事ハ前數條ニ記載シタル處分中何人ニ限ラス

允許ヲ得スシテ其場所ニ出入スルヲ禁スルヲ得

若シ其禁ヲ犯ス者アル時ハ之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終ルマテ之ヲ留置スルヲ得

第六十八條 豫審判事ハ其管轄地内ト雖モ時宜ニ因リ臨檢家宅搜索ノ事ヲ其地ノ治安判事ニ囑託スルヲ得

第六十九條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ驛遞電信鐵道ノ官署諸會社ニ其事由ヲ通知シ被告人又ハ豫審ニ關係アル者ヨリ發シ若クハ是等ノ者ニ對シ發シタル書類電報又ハ物件ヲ

受取開披スルヲ得但受取證書ヲ渡ス可シ

前項ノ書類物件不用ニ屬シタル時ハ其官署又ハ會社ニ還付ス可シ



第七十條 豫審判事ハ檢事民事原告人又ハ被告人ヨリ證人トシテ

指名シタル者ヲ呼出ス可シ 原告證人被告證人ノ員數夥多ナル時ハ指名ノ順序ニ從ヒ又ハ最モ

事實ヲ知ル可シト恩料シタル者輕罪事件ニ付テハ各五名重罪事件

ニ付テハ各十名ヲ限リ先ツ之ヲ呼出ス可シ但事實發見ノ爲メ必要

ナリトスル時ハ此限ニ在ラス 又原被告ノ指名セサル者ト雖モ豫審判事ノ職權ヲ以テ證人トシテ之

ヲ呼出ス可シ得 第七十一條 證人ハ豫審判事ノ名ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ但其呼出

狀ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ之ヲ送達ス可シ 若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事又ハ治安判事

ノ事ヲ囑託ス可シ 第七十二條 豫審判事ハ證人裁判所々在ノ地ニ住セサル時ハ其住

所ノ地ノ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルヲ得 若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事又ハ治安判事

ニ訊問ノ事ヲ囑託スルヲ得 本條ノ場合ニ於テ呼出狀ハ囑託ヲ受ケタル判事ノ名ヲ以テ其裁判

所ノ書記局ヨリ之ヲ送達ス可シ 第七十三條 呼出狀ニハ證人ノ氏名住所及ヒ職業ヲ記載ス可シ

又出頭ノ日時場所及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡シ且勾引ス

ルヲアル可キ旨ヲ記載ス可シ 呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ

第七十四條 證人疾病公務其他正當ノ事故ニ因リ呼出ニ應スル能

ハサルヲ證明シタル時ハ豫審判事其所在ニ就テ之ヲ訊問ス可シ

第七十五條 證人以ト爲ル可キ者陸海軍在營ノ軍人軍屬ナル時ハ其



所屬長官ヲ經由シテ呼出狀ヲ送達ス其長官ハ即時ニ出廷セシム可  
キコトヲ認可シ又ハ職務上已ムコトヲ得サル差支アル時ハ其事由ヲ付  
シテ出廷ノ延期ヲ豫審判事ニ請求ス可シ

第七十六條

豫審判事ハ前二條ニ定メタル差支ノ場合ヲ除クノ外  
證人呼出ニ應セサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ二圓以上十圓以下ノ罰  
金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス  
豫審判事ハ其證人ニ對シ罰金ノ言渡書ト共ニ再度ノ呼出狀ヲ送達  
シ又ハ直チニ勾引狀ヲ發スルコトヲ得但其費用ハ證人ヲシテ之ヲ擔  
當セシム

若シ證人再度ノ呼出ニ應セサル時ハ二倍ノ罰金ヲ言渡シ且勾引狀  
ヲ發スルコトアル可シ

第七十七條

豫審判事ハ證人初度又ハ再度ノ呼出狀ヲ受ケサルコ  
ト其呼出狀第七十三條ノ規則ニ背キタルコト又ハ豫知シ難キ正當ノ

事故アリテ出廷スル能ハサリシコトヲ證明シタル時ハ檢事ノ意見ヲ  
聽キ其罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ

第七十八條

證人呼出狀ニ因リ出廷シタル時ハ其呼出狀ヲ書記ニ  
差出ス可シ若シ之ヲ遺失シタル時ハ其人違ナキコトヲ證明ス可シ

第七十九條

豫審判事ハ証人トシテ呼出シタル者ニ對シ其氏名年  
齡職業住所及ヒ第八十一條ニ記載シタル者ナリヤ否ヲ問フ可シ

第八十條

豫審判事ハ証人ヲシテ愛憎畏懼ノ心ナク正實ニ陳述ヲ  
爲ヌ可キコトヲ宣誓セシム可シ

豫審判事ハ証人ニ宣誓書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム者ハ署名

捺印スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

宣誓書ハ訴訟書類ニ添置シ得

第八十一條

左ニ記載シタル者ハ証人ト爲ルコトヲ許サス但實事ニ  
考メ其陳述ヲ聽クコトヲ得



一 民事原告人

五十六

二 民事原告人及ヒ被告人ノ親屬  
三 民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ是等ノ者ノ後見ヲ受クル者  
四 民事原告人及ヒ被告人ノ雇人

第八十二條

左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ

一 十六歳未満ノ幼者

二 知覺精神ノ不充分ナル者

三 瘡癩者

四 公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者

五 重罪事件ニ付キ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ受ケ又ハ重禁錮ノ刑

ニ該ル可キ輕罪事件ニ付キ公判ニ付セラレタル者

六 現ニ陳述ヲ爲ス可キ事件ニ付キ曾テ訴ヲ受ケ其証憑充分ナラサ

ルニ因リ免訴ノ言渡ヲ受ケタル者

第八十三條

證人宣誓ヲ肯セズ又ハ宣誓シテ陳述ヲ肯セサル時ハ

豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第八十條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可

シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

醫師藥商穩婆又ハ代言人辯護人代書人公証人若クハ神官僧侶其身

分職業ニ關スル秘密ノ事件ニ付キ委託ヲ受ケタル者ハ前項ノ例ニ

在ラス

第八十四條

証人ハ他ノ証人及ヒ被告人ト各別ニ之ヲ訊問ス可シ

但事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ証人ト他ノ証人又ハ被告人

ト對質セシムルヲ得

第八十五條

豫審判事ハ証人ノ陳述ヲ確實ナラシムル爲メ必要ナ

リトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所又ハ其他ノ場所ニ同行スルヲ得

若シ証人同行スルヲ肯セサル時ハ第七十六條ノ規則ニ從ヒ罰

金ヲ言渡ス可シ

五十七



第五百八十六條 第五百五十六條 第五百五十七條ノ規則ハ証人ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第五百八十七條 皇族又ハ勅任官証人ナル時ハ豫審判事書記ト共ニ其所在ニ就テ陳述ヲ聽ク可シ

第五百八十八條 書記ハ証人ノ陳述ニ付キ各別ニ調書ヲ作ル可シ其調書ニハ証人宣誓ヲ爲シタルヲ又ハ爲サ、ルノ事由ヲ記載ス可シ

第五百八十九條 豫審判事ハ証人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ知ラシムル爲メ書記ヲシテ調書ヲ聞カセシム可シ

証人ハ其陳述ヲ變更増減セシム可シ其請求アリタルヲ及ヒ變更増減ノ條件ヲ調書ニ記載シ豫審判事及ヒ証人ト共ニ署名捺印ス可シ若シ証人署名捺印スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

第九十條 証人ハ即時ニ出廷ニ付テノ旅費日當ヲ要ムルヲ得若シ日稼ヲ以テ生業トスル者ナル時ハ旅費日當ノ外日稼高ニ等シキ價金ヲ要ムルヲ得

本條ノ場合ニ於テハ豫審判事其金額ヲ定メ之ヲ言渡ス可シ

第七條 鑑定

第九十一條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法及ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定人ヲ必要ナリトスル時ハ學術職業ニ因リ鑑定スルヲ得可キ者一名又ハ數名ヲシテ鑑定ヲ爲サシム可シ

第九十二條 鑑定人ハ書記局ヨリ呼出狀ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ其呼出狀ニハ犯罪事件ニ付キ鑑定ヲ命スルヲ及ヒ呼出ニ應シサル時ハ罰金ヲ言渡ス可キヲ記載ス可シ

鑑定人呼出ニ應セサル時ハ第七十六條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ但勾引狀ヲ發スルヲ得ス



第七十七條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第九十三條 鑑定人ハ正實ニ鑑定ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ其宣誓

ハ第九十條ノ式ニ從フ

書記ハ鑑定人ノ宣誓シタルヲ鑑定命令書ノ紙尾ニ記載シ之ニ宣誓書ヲ添置ス可シ

第九十四條

鑑定人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ鑑定ヲ肯セサル時ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第七十九條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

第九十五條

第八十一條第八十二條ニ記載シタル者ニハ鑑定ヲ命スルヲ得ス但急速ノ際正當ノ鑑定人ト爲ル可キ者ナキ時ハ事實參考ノ爲メ鑑定ヲ命スルヲ得

第九十六條

豫審判事ハ成ル可ク鑑定ニ立會フ可シ

第九十七條

豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ鑑定

人ヲ増加シ又ハ別人ヲシテ鑑定セシムルヲ得

第九十八條

鑑定人ハ鑑定書ヲ作り其手續結果及ヒ鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記ス可シ

若シ結果ヲ得サル時ハ其推測スル所ヲ記載ス可シ

鑑定人意見ヲ異ニスル時ハ各自鑑定書ヲ作り又ハ各自ノ意見ヲ一箇ノ鑑定書ニ記載ス可シ

第九十九條

鑑定人ハ鑑定書ニ年月日ヲ記載シ署名捺印及ヒ契印ス可シ

又鑑定書ニハ豫審判事之ヲ受取リタル年月日ヲ記載シ書記ト共ニ

捺印ス可シ

鑑定書ハ鑑定命令書ニ添置ス可シ

外國人鑑定ヲ爲シタル時ハ其鑑定書ニ裁判所ヨリ命シタル通事ノ作りタル譯本ヲ添置ス可シ



第二百條

鑑定人及通事ニハ旅費給料其他相當ノ費用ヲ給與ス可シ

第八節

現行犯ノ豫審

第二百一一條

豫審判事ハ檢事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スル時ハ檢事ノ請求ヲ待タズ直ニ其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ルヲ得

豫審判事ハ犯所ニ臨檢シ令狀ヲ發シ其他此章ニ定メタル規則ニ從ヒ豫審ノ處分ヲ爲スヲ得

第二百一二條

前條ノ場合ニ於テハ檢事ノ起訴ナシト雖モ豫審判事檢事調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ受理シタル者トス其調書ニハ現行ノ重罪又ハ輕罪ナルヲ記載ス可シ

豫審判事ハ速ニ書類ヲ檢事ニ送致ス再ニ但檢事ヨリ其豫審手續ヲ繼續ス可キ者ニ非サルノ意見アリト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ之ヲ終

結ス可シ

第二百一三條

檢事ハ豫審判事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルヲ知リタル時ハ豫審判事ヲ待ツヲナク其旨ヲ通知シテ犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スヲ得但罰金ノ旨渡ヲ爲スヲ得ス

第二百一四條

前條ノ場合ニ於テ檢事ハ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

第二百一五條

第二百一三條ニ於テ檢事ニ許シタル職務ハ司法警察官モ亦假ニ之ヲ行フヲ得但令狀ヲ發スルヲ得ス

第二百一六條

檢事被告人ヲ受取リタル時ハ二十四時内ニ之ヲ訊問シ調書ヲ作り勾留狀ヲ發スルト否トヲ問ハス一切ノ書類ニ請求書ヲ



添へ豫審判事ニ送致ス可シ  
若シ起訴ヲ爲ス可カラサル者ト認メタル時ハ直チニ被告人ヲ放免ス可シ

第二百七條 豫審判事ハ二十四時内ニ被告人ヲ訊問ス可シ此場合ニ於テハ檢事ノ發シタル勾留狀ヲ解キ又ハ之ヲ存スルヲ得

第二百八條 豫審判事ハ檢事又ハ司法警察官ノ爲シタル手續ニ付キ更ニ其取調ヲ爲スヲ得但檢事又ハ司法警察官ノ作りタル調書ハ之ヲ訴訟書類ニ添置ク可シ

第二百九條 檢事ハ輕罪ノ現行犯ニ係ル場合ニ於テ勾留狀ヲ發シタルト否トニ拘ハラズ被告人ヲ訊問シタル後豫審ヲ求ムルニ及ハスト思料シタル時ハ直チニ輕罪裁判所ニ呼出ヌヲ得

第九節 保釋  
第二百十條 豫審判事ハ豫審中勾留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人

ノ請求ニ因リ檢事ノ意見ヲ聽キ何時ニテモ呼出ニ應シ出廷ス可キ  
ノ證書ヲ差出サシメ保釋ヲ許スヲ得

被告人無能力ナル時ハ親屬又ハ代人ヨリ保釋ヲ求ムルヲ得

第二百十一條 前條ノ證書ハ書記局ニ差出ヌ可シ  
保釋中被告人ヲ呼出ヌ時ハ出廷ヨリ二十四時前ニ其報知ヲ爲ヌ可シ

第二百十二條 保釋ヲ許スニハ金圓ヲ以テ被告人ノ出廷ヲ保証セシム可シ但豫審判事其金額ヲ定メ保釋ヲ許スノ旨渡書ニ記載ス可シ

第二百十三條 保証ヲ爲スニハ被告人又ハ其他ノ者ヨリ保証金若クハ貯金預所又ハ銀行ノ預証書ヲ書記局ニ差出ヌ可シ  
又裁判所ノ管轄地内ニ住シ且充分ナル資力アル者ヨリ金額ニ充ツ可キ保証書ヲ差出ヌヲ得

第二百十四條 保釋中被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セ



ナル時ハ保証金ノ全部又ハ幾分ヲ没入ス可シ

第二百十五條 保証金ヲ没入スルニハ檢事ノ意見ヲ聽キ豫審判事其言渡ヲ爲ス可シ

若シ他人ノ保証ニ係ル時ハ民事ノ規則ニ從ヒ之ヲ徵収ス可シ

第二百十六條 豫審判事保証金ヲ没入シタル時ハ保釋ノ言渡ヲ取消ス可シ

又豫審中保釋ノ言渡ヲ取消スヲ必要ナリトスル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其言渡ヲ取消ス可シ

第二百十七條 豫審判事保証金ヲ没入シタル後免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移

スノ言渡ヲ爲シタル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ前ニ没入シタル金額ヲ還付ス可シ

第二百十八條 豫審判事免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ

罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ若クハ保釋ノ言渡ヲ取消シタル時ハ保証金ヲ還付ス可シ

第二百十九條 豫審判事ハ保釋ノ請求アルト否トヲ問ハス檢事ノ意見ヲ聽キ被告人ヲ其親屬又ハ故舊ニ責付スルヲ得

第十節 豫審終結

第二百二十條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非ストシ又ハ他ニ取調ヲ要スルコトナシト思料シタル時ハ豫審終結ノ處分ニ付キ檢事ノ意見ヲ求ムル爲メ一切ノ訴訟書類ヲ送致ス可シ

檢事ハ訴訟書類ニ意見ヲ付シ三日内ニ之ヲ還付ス可シ

第二百二十一條 檢事ハ豫審充分ナシト思料シタル時ハ其條件ニ付キ更ニ取調ヲ請求スルヲ得若シ豫審判事其請求ヲ肯セサル時

ハ檢事訴訟書類ニ意見ヲ付シ二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ  
第二百二十二條 豫審判事ハ檢事ノ意見如何ナルヲ問ハズ後ニ記載



シタル言渡ヲ以テ豫審ヲ終結ス可シ

第二百二十三條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非サルコトヲ認メタル時ハ其旨ヲ言渡ス可シ若シ勾留ヲ要スル者ト認メタル時ハ前ニ發シタル令狀ヲ存シ又ハ新ニ令狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付ス可シ

第二百二十四條

豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告

- 一 犯罪ノ証憑充分ナラサル時
- 二 被告事件罪ト爲ラサル時
- 三 公訴ノ期滿免除ト爲リタル時
- 四 確定裁判ヲ經タル時
- 五 大赦アリタル時
- 六 法律ニ於テ其罪ヲ全免スル時

本條ノ場合ニ於テ被害者ハ民事裁判所ニ非サレハ要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得ス

第二百二十五條

被告事件違警罪ナリト思料シタル時ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ且被告勾留ヲ受ケタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百二十六條

被告事件輕罪ナリト思料シタル時ハ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ

被告勾留ヲ受ケタル場合ニ於テ罰金ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

禁錮ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲スコトヲ得

若シ被告人未ダ勾留ヲ受ケサル時ハ令狀ヲ發スルコトヲ得

第二百二十七條

被告事件重罪ナリト思料シタル時ハ重罪裁判所ニ



移スノ言渡ヲ爲ス可シ若シ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲シタル時ハ其言渡ヲ取消ス可シ

重罪裁判所ニ移スノ言渡審ニハ控訴裁判所檢事長ノ指揮アルマテ豫審ヲ爲シタル裁判所ノ監倉ニ被告人ヲ留置ス可キヲ記載ス可シ

第二百二十八條 豫審終結ノ言渡ニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ付ス可シ

管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲スニハ其原由ヲ明示シ若シ被告人ヲ勾留ス可キ時ハ其原由ヲ明示ス可シ

免訴ノ言渡ヲ爲スニハ被告事件罪ト爲ラサルヲ公訴受理ス可カラサルヲ及ヒ其原由又犯罪ノ證據充分ナラサル時ハ其旨ヲ明示ス可シ

違審罪裁判所輕罪裁判所又ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲スニハ

犯罪ノ性質様樣証憑ノ充分ナルヲ及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ明示ス可シ

第二百二十九條 前條ノ言渡書ニハ第三百三十條ノ規則ニ從ヒ被告人ノ氏名等ヲ明示ス可シ

第二百三十條 書記ハ速ニ豫審終結ノ言渡書ノ原本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送達ス可シ但是等ノ者ハ第二百四十六條以下ノ規則ニ從ヒ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得

第二百三十一條 被告人ヲ逮捕スルヲ能ハサル場合ニ於テ重罪裁判所又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ其旨ヲ言渡書ニ記載ス可シ但被告人ハ現ニ勾留ヲ受ケルニ非サレハ其旨渡ニ對シ上訴ヲ爲スヲ得

第二百三十二條 前條ノ場合ニ於テ檢事又ハ民事原告人ハ假ニ被告人ノ財産ヲ差押フ可キヲ民事裁判所ニ請求スルヲ得



第二百三十三條

豫審終結ノ旨ヲ言渡シタル時ハ豫審判事ヨリ速ニ其旨ヲ裁判所長ニ報告ス可シ

又十五日毎ニ未決ノ豫審事件ニ付キ簡畧ナル報告書ヲ差出ス可シ

第四章 豫審上訴

第二百三十四條

左ノ場合ニ於テハ檢事又ハ被告人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スコトヲ得

一 管轄違ノ申立ヲ棄却シタル時

二 法律ニ背キ令狀ヲ發シ又ハ之ヲ發セサル時

三 法律ニ背キ保釋責付ヲ爲シ又ハ之ヲ爲ササル時

四 越權ノ處分アル時

民事原告人ハ私訴ニ付キ第四ノ場合ニ於テ故障ヲ爲スコトヲ得

第二百三十五條

故障ヲ爲サントスル者ハ其裁判所ノ書記局ニ趣意書ヲ差出ス可シ

故障アリタル時ハ書記其趣意書ノ原本ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ

三日内ニ答辯書ヲ差出スコトヲ得

故障ニ付テハ豫審處分ノ執行ヲ停止セズ但保釋責付ヲ爲シタルニ

付キ檢事ヨリ故障アリタル時ハ其執行ヲ停止ス

第二百三十六條

故障ハ其裁判所ノ會議局ニ於テ判事三名以上ニテ趣意書答辯書其他訴訟書類及ヒ檢事ノ意見書ニ依リ之ヲ判決ス可シ

會議局ノ言渡ハ速ニ之ヲ執行ス但其言渡ニ對シテハ豫審終結ノ旨

渡アリタル後上告ヲ爲スコトヲ得

第二百三十七條

左ノ場合ニ於テハ檢事被告人又ハ民事原告人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ豫審判事ヲ忌避スルコトヲ得

一 豫審判事又ハ其配偶者ト被告人被害者又ハ是等ノ者ノ配偶者ト

親屬ナル時



二 豫審判事被告入又ハ民事原告人ノ後見人ナル時

三 豫審判事又ハ其配偶者ニ於テ民事原告人被告人又ハ是等ノ者ノ親屬ヨリ賄賂ニ非スト雖モ贈物ヲ收受シ若クハ聽許シタル時

第二百三十八條 忌避ノ申立ハ豫審判事ニ之ヲ爲ス可シ但其申立ヲ爲スニハ趣意書ニ通テ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ趣意書ヲ豫審判事ニ送致シ豫審判事ハ其送致ヲ受ケタルヨリ二十四時内ニ其申立ヲ認可シ又ハ棄却スルヲ趣意書ノ紙尾ニ記載シ一通ヲ書記局ニ藏置シ一通ヲ本人ニ送達ス可シ

第二百三十九條 豫審判事忌避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ其申立人ヨリ故障ヲ爲スヲ得

會議局ニ於テハ故障ノ趣意書及ヒ豫審判事ノ辨明書ニ依リ判決ヲ爲ス可シ

第二百四十條 豫審判事ハ忌避ノ申立アリタル時又ハ其申立ヲ棄却シタル時付キ故障アリタル時ト雖モ豫審ノ手續ヲ繼續ス可シ但終

シタルニ付キ故障アリタル時ト雖モ豫審ノ手續ヲ停止スルヲ得又急遽ヲ要セサル事件ニ付テハ豫審ノ手續ヲ停止スルヲ得

第二百四十一條 會議局ニ於テ忌避ニ付テノ故障ヲ棄却シタル時ハ上告ヲ爲スヲ得但豫審終結ノ旨渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スヲ得

第二百四十二條 豫審判事自ラ第二百三十七條ニ定メタル理由アルヲ認メ又ハ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ會議局ニ回避ノ申立

ヲ爲ス可シ 回避ノ申立ハ會議局ニ於テ之ヲ判決ス可シ

第二百四十三條 會議局ニ於テ忌避又ハ回避ノ申立ヲ認可シタル時ハ裁判所長更ニ他ノ判事ヲシテ豫審ヲ爲サシム可シ其判事ハ檢事

其他訴訟關係人ノ請求ニ依リ又ハ職權ヲ以テ前豫審判事ノ爲シタ



ル處分ト雖モ更ニ取調ヲ爲スヲ得

第二百四十四條 書記ハ自ら回避シ又ハ檢事其他訴訟關係人ヨリ會議局ニ申立テ之ヲ忌避スルヲ得

第二百四十五條 檢察官ハ被告人又ハ民事原告人ヨリ之ヲ忌避スルヲ得ス若シ自ら回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ會議局ニ申立ツルヲ得

檢事補自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ檢事ニ申立ツ可シ檢事ハ其申立ヲ許否ス可シ

第二百四十六條 檢事ハ總テ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得

民事原告人ハ私訴ニ付キ越權ノ處分アルニ因リ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得

被告人ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得輕罪裁判所又ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シテハ豫審判事ノ管轄邊越權又ハ其事件ヲ移ス可キ裁判所ノ管轄邊ニ非サレハ故障ヲ爲スヲ得

第二百四十七條 故障ノ期限ハ一日ナリトス但言渡書ノ送達アリタルヨリ之ヲ起算ス

第二百四十八條 檢事民事原告人及ヒ被告人故障ヲ爲スニハ申立書ヲ書記局ニ差出ス可シ書記ハ速ニ其旨ヲ對手人ニ通知ス可シ

故障申立人ハ三日内ニ趣意書ヲ書記局ニ差出ス可シ書記ハ速ニ趣意書ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出スヲ得

第二百四十九條 故障アリタル時ハ對手人ヨリ其判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ故障ヲ爲スヲ得

附帶ノ故障アリタル時ハ書記ヨリ其趣意書ヲ對手人ニ送達ス可シ



對手人ハ三日内ニ答辨書ヲ差出ス可シ

第二百五十條 豫審終結ノ旨渡ハ故障ノ期限内又故障アリタル時ハ其判決アルマテ執行ヲ停止ス但被告人ヲ勾留シ又ハ保釋責任ヲ取消スノ旨渡ハ其執行ヲ停止セズ

第二百五十一條 書記ハ故障趣意書答辨書其他訴訟書類ヲ會議局ニ差出ス可シ

第二百五十二條 會議局ニ於テハ第二百五十六條ノ規則ニ從ヒ故障ノ判決ヲ爲ス可シ

豫審判事ノ旨渡ヲ認可シタル時ハ其旨ヲ言渡シ若シ其全部又ハ幾分ヲ取消シタル時ハ全部ニ付キ更ニ言渡ヲ爲ス可シ又被告人ヲ保釋責任付シ又ハ勾留スルノ旨渡ヲ爲ス可シ

第二百五十三條 會議局ニ於テ必要ナリトスル時ハ判事一名ナシテ更ニ豫審ヲ爲シ又ハ其指示スル所ノ條件ニ付キ更ニ取調ヲ爲シ其

報告書ヲ差出サシム可シ

第二百五十四條 會議局ニ於テ故障ノ取調中管轄越權又ハ公訴受理ス可カラサルトシテ職權ヲ以テ豫審判事ノ旨渡ヲ取消ス可シ

第二百五十五條 會議局ニ於テ故障ノ取調中共犯ノ起訴ヲ受ケサル

者アルトシテ附帶ノ犯罪ニ付キ豫審ヲ受ケサル者アルトシテ職權ヲ以テ判事一名ナシテ豫審ヲ爲シ

其報告書ヲ差出サシム可シ

檢事ハ意見書ヲ差出ス可シ

第二百五十六條 故障ノ判決アリタル時ハ速ニ其旨言渡書ノ原本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送達ス可シ



第二百五十七條 檢事其他訴訟關係人ハ會議局ノ言渡ニ對シ上告ヲ爲スヲ得

第二百五十八條 被告人ニ送達ス可キ言渡書ニハ其言渡ニ對シ上訴スルヲ得可キ及ヒ其期限ヲ記載ス可シ其記載ナキ時ハ規則ニ從ヒ更ニ言渡書ノ送達アルマテ被告人上訴ノ權ヲ失フナカル可シ

第二百五十九條 第三百十一條ヨリ第三百十三條マテノ規則ハ豫審ノ上訴ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第二百六十條 重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事其言渡書ニ一切ノ書類ヲ添ヘ速ニ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致ス可シ檢事長ハ一切ノ書類證據物件及ヒ被告人ヲ重罪裁判所ニ移スノ處分ヲ檢事ニ命ヌ可シ

重罪裁判所以外ノ裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事速ニ其執行ヲ爲ス可シ

第二百六十一條 豫審ニ於テ被告人免訴ノ言渡ヲ受ケ其言渡確定シタル時ハ罪名ノ變更アルモ同一ノ事件ニ付キ更ニ訴ヲ受クルヲナカル可シ但新ナル證據アル時ハ此限ニ在ラス  
新ナル證據アル時ハ檢事ヨリ之ヲ會議局ニ差出シ會議局ニ於テハ其起訴ヲ許ス可キヤ否ヲ判決ス可シ

第四編 公判

第一章 通則

第二百六十二條 訴訟事件ハ書記局ノ簿冊ニ登記シタル順序ニ從ヒ之ヲ公判ニ付ス可シ

裁判所長ハ未決拘留ノ日數ヲ減縮スル爲メ職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルヲ得

又重要ナル事由ノ爲メ檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタル時モ亦順序ニ變更スルヲ得



第二百六十三條 重罪輕罪違警罪ノ訊問辯論及ハ裁判言渡ハ之ヲ公  
行ス否ヲサレ時ハ其言渡ノ効ナカル可シ

第二百六十四條 被告事件公安ヲ害シ又ハ猥褻ニ涉リ風俗ヲ害スル  
ノ恐アル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其  
訊問及ヒ辯論ノ傍聴ヲ禁スルヲ得其裁判言渡ヲ爲スニ當テハ傍  
聴ヲ許ス可シ

第二百六十五條 被告人ハ公庭ニ於テ身體ノ拘束ヲ受クルヲナレ但  
守奉ヲ置クヤアル可シ

禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人疾病アルニ非スレテ出廷ヲ肯セサ  
ル時ハ之ヲ引致スルヲ得若シ出廷シテ辯論スルヲ肯セサル時  
ハ對審トシテ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第二百六十六條 被告人ハ辯論ノ爲メ辯護人ヲ用フルヲ得  
辯護人ハ裁判所ノ屬ノ代官人中ヨリ之ヲ選任ス可シ但裁判所ノ允

許ヲ得タル時ハ代官人ニ非サル者ト雖モ辯護人ト爲スヲ得

第二百六十七條 被告人公庭ニ於テ暴行又ハ喧噪ヲ爲シ辯論ヲ妨礙  
スル時ハ裁判長ヨリ再度告戒ヲ爲シ仍ホ之ニ從ハサル時ハ檢察官  
ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ被告人ヲ退廷セシメ若クハ拘留スル  
ヲ得

前項ノ場合ニ於テハ對審トシテ引續キ辯論及ヒ裁判言渡ヲ爲ス  
ヲ得

若シ辯論二日ニ渉ル時ハ更ニ被告人ヲ出廷セシム可シ

第二百六十八條 被告人精神錯亂又ハ疾病ニ因リ出廷スルヲ能ハサ  
ル時ハ痊癒ニ至ルマテ辯論ヲ停止ス  
辯論ニ取掛リタル後被告人精神錯亂シタル時ハ其痊癒ノ後新ニ辯  
論ヲ爲ス可シ其他ノ疾病ニ罹ル時ハ痊癒ノ後前ニ停止シタルヨリ  
以後ノ手續ヲ爲ス可シ但五日間辯論ヲ停止シ又ハ檢察官其他訴訟



關係人ノ請求アリタル時ハ新ニ辯論ヲ爲ス可シ  
若シ被告事件及ヒ法律ノ適用ニ付キ既ニ辯論ヲ終リタル時ハ其座  
癒ノ後更ニ取調ヲ爲スコトナク裁判言渡ヲ爲ス可シ

第二百六十九條

禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人公判ノ日時ニ出廷  
セスト雖モ豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達シタルノ證

アルコト非サレハ調席裁判ヲ爲ス可カラズ  
豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達スルコト能ハサル場合ニ

於テハ裁判所ニテ猶豫ノ期限ヲ定メ其期限内ニ被告人出廷セサル  
時ハ調席裁判ヲ爲ス可キヲ告知書ヲ親屬若クハ戸長ニ送達ス可シ

第二百七十條

調席シタル被告人ニ付テハ辯護人ヲ用フルコトヲ許サ  
ス但其親屬故舊ハ被告人ノ出廷スルコト能ハサルノ事由ヲ証明スル

コトヲ得  
裁判所ニ於テ其事由ヲ正當ナリトスル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁

判ヲ延期スルコトヲ得

第二百七十一條

被告人中ノ一名又ハ數名出廷セシト雖モ出廷シタ  
ル者ニ付テハ通常ノ規則ニ從ヒ對審裁判ヲ爲ス可シ

第二百七十二條

裁判長ハ公庭ニ於テ諸般ノ取締ノ爲メ相當ノ處置  
ヲ爲ス可シ

稱讚誹謗其他辯論ヲ妨礙スル者アル時ハ之ヲ制止シ又ハ退廷セシ  
ムルコトヲ得

第二百七十三條

分庭ニ於テ輕罪違警罪ヲ犯シタル者アル時ハ其身  
分ノ如何ニ拘ハラス裁判長ノ命令ニ因リ之ヲ取押へ檢察官ノ意見

ヲ聽キ直チニ裁判ヲ爲シ又ハ次ノ公判ニ付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

書記ハ犯罪ノ事件及ヒ裁判長ノ處分ニ付キ即時ニ調書ヲ作ル可シ

第二百七十四條

前條ノ場合ニ於テ違警罪裁判所ニテハ違警罪ニ付  
キ終審ノ裁判ヲ爲シ輕罪ニ付キ始審ノ裁判ヲ爲ス可シ

八十五



輕罪裁判所其他上等ノ裁判所ニテハ輕罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲ス可シ

第二百七十五條 公廷ニ於テ重罪ヲ犯シタル者アル時ハ裁判長被告人及ヒ證人ヲ訊問シ調書ヲ作り裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ通常ノ規則ニ從ヒ裁判スル爲メ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百七十六條 裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケサル事件ニ付キ裁判ヲ爲ス可カラズ但辯論ニ因リ發見シタル附帶ノ事件及ヒ公廷内ノ犯罪ニ付テハ此限ニ在ラス  
若シ附帶ノ事件ニ付キ豫審ヲ必要ナリトスル時ハ本案ノ裁判ヲ停止スルヲ得

第二百七十七條 檢察官被告人及ヒ民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハズ本案ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ管轄違又ハ公訴受理ス可カラ

ナルノ申立ヲ爲スヲ得  
裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサルノ言渡ヲ爲スヲ得

第二百七十八條 裁判所ニ於テ前條ノ申立ヲ棄却シタル時ハ本案ノ裁判言渡ヲ待タズ直チニ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第二百七十九條 檢察官其他訴訟關係人ハ第二百三十七條ニ定メタル理由アル時ハ違警罪裁判所輕罪裁判所控訴裁判所又ハ重罪裁判所ノ裁判官及ヒ書記ニ對シ忌避ノ申立ヲ爲スヲ得  
豫審ヲ爲シタル裁判官其公判ニ干預シ又ハ始審裁判ヲ爲シタル裁判官其終審裁判ニ干預シタル時亦同シ

第二百八十條 忌避ノ申立ハ本案ノ裁判言渡ニ至ルマテ何時ニテモ之ヲ爲スヲ得



忌避ノ申立アリタル時ハ本業ノ辯論ヲ停止ス

第二百八十一條

忌避又ハ回避ノ申立及ヒ其判決ヲ爲スニハ第二百

三十八條ヨリ第二百四十五條マデニ定メタル規則ニ從フ

第二百八十二條

忌避又ハ回避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ前ニ停止シ

タルヨリ以後ノ手續ニ取掛ル可シ但五日間辯論ヲ停止シタル時ハ

新ニ辯論ヲ爲ス可シ

變災厄難ノ爲メ訴訟手續ヲ停止シタル時亦同シ

第二百八十三條

公判ニ於テ用フ可キ證據ハ豫審ニ於テ用フ可キ証

據ニ同シ

第二百八十四條

裁判長ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ

職權ヲ以テ豫審中管轄官吏ノ作リタル調書及ヒ檢證書類ヲ朗讀セ

シムルヲ得

是等ノ書類ハ原被証人ノ陳述ト同一ノ効ヲ有ス

第二百八十五條

調書ヲ作リタル司法警察官ハ檢察官其他訴訟關係

人ヨリ証人トシテ之ヲ呼出シ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ之ヲ呼出ス

ヲ得

豫審判事ハ裁判所ノ職權ニ因リ又ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ其

裁判所ノ允許ヲ得テ調書説明ノ爲メ之ヲ呼出スヲ得

第二百八十六條

豫審ニ於テ訊問シタル証人ハ更ニ之ヲ呼出スヲ得

得

豫審ニ於テ錄取シタル証人ノ陳述書ハ更ニ其証人ヲ呼出サハル時

證人呼出ヲ受ケ出廷セサル時又ハ豫審及ヒ公判ニ於テノ陳述ヲ比

較ス可キ時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判長ノ職

權ヲ以テ之ヲ朗讀セシムルヲ得

第二百八十七條

第七十八條以下ノ規則ハ公判ノ證人ニモ亦之ヲ

適用ス



第二百八十八條 証人ハ互ニ言語ヲ接ス可カラス又陳述前辯論ニ立會フ可カラズ 九十

第二百八十九條

証人ハ左ノ順序ニ從ヒ訊問ス可シ

一 檢察官ノ請求ニ因リ呼出シタル証人

二 民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル証人

三 被告人及ビ民事擔當人ノ請求ニ因リ呼出シタル証人

第二百九十條

証人數名アル時ハ氏名目録ノ順序ニ從ヒ之ヲ訊問ス可シ但裁判長ハ証人ヲ呼出シタル者ノ意見ヲ聽キ其順序ヲ變更スルヲ得

第二百九十一條

証人及ビ被告人ハ裁判長ニ非サレハ之ヲ訊問スルヲ得

陪席判事及ビ檢察官ハ裁判長ニ告ケ証人及ビ被告人ヲ訊問スルヲ得

訴訟關係人ハ辯論ニ必要ナリトスル條件ヲ分明ナラシムル爲メ證人ヲ訊問ス可キヲ裁判長ニ求ムルヲ得

第二百九十二條

証人ノ陳述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ取押ヘ勾引狀ヲ以テ豫審判事ニ送致ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

其証人ノ陳述ハ書記之ヲ錄取シ豫審判事ニ送致ス可シ本條ノ場合ニ於テハ裁判所ニテ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ本案ノ事件ニ付キ裁判ノ延期ヲ言渡スヲ得

第二百九十三條

証人呼出ニ應ヒサル時ハ裁判所ニ於テ即時ニ檢察官ノ意見ヲ聽キ左ノ科料罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故

障及ビ控訴ヲ許サズ

一 違警罪事件ニ付テハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ科料



二輕罪以上ノ事件ニ付テハ二圓以上十圓以下ノ罰金  
被告人關席シタル時ハ其呼出シタル証人出庭セスト雖モ科料罪金  
ヲ言渡ス可シ

第二百九十四條 前條ノ言渡書ハ即時ニ書記ヨリ本人ニ送致ス可シ  
其言渡書受ケタル者三日内ニ出庭スルヲ能ハサリシ正當ノ事由ヲ  
證明シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ科料又ハ罰金ノ  
言渡ヲ取消ス可シ但重罪裁判所閉廳ノ後ハ其關廳シタル裁判所ニ  
其申立ヲ爲ス可シ

第二百九十五條 証人呼出ニ應セサル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ  
請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公判ヲ延期スルノ言渡ヲ爲ス  
ヲ得  
檢察官自ラ其請求ヲ爲サル時ハ公判ノ延期ニ付キ意見ヲ陳述ス  
可シ

第二百九十六條 証人再度ノ呼出ヲ受ケ仍ホ出庭セサル時ハ檢察官  
ノ意見ヲ聽キ前ニ定メタル科料罰金ノ二倍及ヒ再度ノ呼出ノ費用  
ヲ言渡ス可シ此場合ニ於テモ亦前條ニ從ヒ再ヒ公判ヲ延期スルヲ  
得但延期シタル時ハ其証人ニ對シ勾引狀ヲ發ス可シ  
第二百九十七條 第九十一條以下ノ規則ハ公判ニ於テ新ニ命シタ  
ル鑑定人ニモ亦之ヲ適用ス但呼出ニ應セサル時ハ第二百九十三條  
ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ  
鑑定人ノ鑑定シタル事件ニ付キ説明ノ爲メ更ニ之ヲ呼出ス時ハ證  
人ニ付キ定メタル前數條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ  
第二百九十八條 被告人譯者譯者又ハ國語ニ通セサル者ナル時ハ第  
百五十六條第百五十七條ノ規則ニ從テ  
第二百九十九條 被告人數名アル時ハ裁判長其意見ヲ述ヘ且檢察官  
其他訴訟關係人ノ意見ヲ聽キ訊問ノ順序ヲ定ム可シ



裁判長ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルコトヲ得

第三百條

證據調濟ノ後檢察官民事原告人被告人其辯護人及ヒ民事

辯護人ハ順次發言ス可シ

檢察官其他訴訟關係人ノ陳述ハ他ヨリ妨礙スルコトヲ得ス

檢察官其他訴訟關係人ハ送ヒニ辯論ヲ爲スコトヲ得但辯論ノ最終ニ

ハ被告人又ハ辯護人チシテ發言セシム可シ

第三百一條

檢察官公訴ヲ拋棄スト雖モ裁判所ニ於テハ本案ニ付キ

相當ノ裁判ヲ爲ス可シ

第三百二條

辯論中公判ノ手續ニ付キ異議ノ申立アリタル時ハ裁判

所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ之ヲ判決ス可シ但其判決ニ對

スル控訴又ハ上告ハ本案ノ裁判言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲

スコトヲ得ス

第三百三條

民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハズ何時ニテモ其訴訟ニ關

係スルコトヲ得

又民事原告人ハ民事擔當人チシテ其訴訟ニ關係セシムルコトヲ得

若シ異議ノ申立アリタル時ハ其裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ其判

決ニ對シテハ本案ノ裁判言渡ヲ待タズ直チニ控訴又ハ上告ヲ爲ス

コトヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第三百四條

裁判所ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲スニハ事實及ヒ法律ニ依リ

其理由ヲ明示シ且一切ノ證據ヲ明示ス可シ

免訴ノ言渡ヲ爲スニ付テモ亦同シ

第三百五條

無罪ノ言渡ヲ爲スニハ其理由トシテ被告人ニ對シ犯罪

ノ證據ナキコトヲ明示ス可シ

第三百六條

裁判所ニ於テハ公訴ノ裁判ト同時ニ私訴ノ裁判言渡ヲ

爲ス可シ



私訴ニ付キ取調未ク充分ナラサル時ハ公訟ノ裁判アリタル後其裁判言渡ヲ爲スヲ得

第三百七條

被告人刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公訴裁判費用ノ全部又ハ幾分ヲ擔當ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ  
免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ公訴裁判費用ハ官ニテ之ヲ擔當ス可シ

第三百八條

被告人刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公訴裁判費用ハ民事ノ規則ニ從ヒ取訴シタル者之ヲ擔當ス可シ  
サル送押物品ハ所有主ノ請求ナシト雖モ之ヲ還付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百九條

本案ノ裁判言渡ニ對スル上訴ノ期限内又上訴アリタル時ハ其判決アルマテ裁判執行ヲ停止ス

第三百十條

禁錮以上ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡セタル時ハ現ニ

第三百十一條

拘留ヲ受ケタル者上訴ヲ爲シ又ハ保釋ヲ求ムル時ハ其申立書ニ監獄長ニ差出シ監獄長ヨリ之ヲ其裁判所ノ書記ニ差出ス可シ

第三百十二條

訴訟關係人又ハ其代人非常ノ變災厄難ニ因リ上訴期限ヲ經過シタル場合ニ於テ其旨ヲ證明シタル時ハ期限ヲ經過シタルニ因リ失ヒタル權利ヲ回復スルコトヲ得但變災厄難ヲ免カレタル

第三百十三條

書記ハ違ニ前條ノ申立書ヲ對手人ニ送達ス可シ對手人ハ三日内ニ答復書ヲ差出スヲ得  
上訴ノ判決ヲ可キ裁判所ニ於テハ會同局ニテ檢察官ノ意見ヲ聽キ

先ヨリ其上訴ヲ受理ス可キ否ヲ判決ス可シ  
上訴ノ受理ヲ可キ者ト判決シタル時ハ書記ヲシテ其旨ヲ訴訟關係



私訴ニ付キ取調未タ充分ナラサル時ハ公訟ノ裁判アリタル後其裁判言渡ヲ爲スヲ得

第三百七條 被告人刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公訴裁判費用ノ全部又ハ幾分ヲ擔當ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ  
免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ公訴裁判費用ハ官ニテ之ヲ擔當ス可シ  
私訴裁判費用ハ民事ノ規則ニ從ヒ敗訴シタル者之ヲ擔當ス可シ

第三百八條 被告人刑ノ言渡ヲ受ケタルト否トナ問ハス沒收ニ係ラサル差押物品ハ所有主ノ請求ナシト雖モ之ヲ還付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百九條 本案ノ裁判言渡ニ對スル上訴ノ期限内又上訴アリタル時ハ其判決アルマテ裁判執行ヲ停止ス  
第三百十條 禁錮以上ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡レタル時ハ現ニ

捕ニ就クコト非サレハ上訴ヲ爲スヲ得ス  
第三百十一條 勾留ヲ受ケタル者上訴ヲ爲シ又ハ保釋ヲ求ムル時ハ其中立書ヲ監獄長ニ提出シ監獄長ヨリ之ヲ其裁判所ノ書記ニ差出ヌ可シ

第三百十二條 訴訟關係人又ハ其代人非常ノ變災厄難ニ因リ上訴期限ヲ經過シタル場合ニ於テ其旨ヲ證明シタル時ハ期限ヲ經過シタルニ因リ失ヒタル權利ヲ回復スルコト得但變災厄難ヲ免カレタルヨリ通常ノ期限内ニ其證據ヲ申立書ニ添へ上訴ヲ爲ス可シ  
第三百十三條 書記ハ連ニ前條ノ申立書ヲ對手人ニ送達ス可シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出ヌヲ得

先ツ其上訴ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ  
上訴ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ書記ヲシテ其旨ヲ訴訟關係



人ニ通知セシメ通常ノ規則ニ従ヒ本案ノ裁判ヲ爲ス可シ  
上訴ヲ受理ス可カラサル者ト判決シタル時ハ他ノ原由アルニ非サ  
レハ即時ニ裁判執行ヲ爲サシム可シ

第三百十四條 裁判官渡ハ辯論ヲ終リタル後公廷ニ於テ即時ニ之ヲ  
爲シ又ハ次日ニ之ヲ爲ス可シ

裁判官渡書ハ其言渡前裁判官之ヲ作り書記ト共ニ署名捺印ス可シ  
裁判官渡書ニハ其言渡ヲ爲シタル裁判所年月日其事件ニ干預シタ  
ル檢察官ノ氏名ヲ記載ス可シ

第三百十五條 訴訟關係人ハ其費用ヲ以テ裁判官渡書ノ謄本又ハ其  
援書ヲ求ムルヲ得但上訴ノ爲メ其求ヲ爲シタル時ハ書記ヨリ二  
十四時内ニ之ヲ下付ス可シ

第三百十六條 對審裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ裁判長ヨリ其  
言渡ヲ受ケタル者ニ前條ノ請求及ヒ其言渡ニ對シ控訴又ハ上告ヲ

爲スヲ得可キヲ及ヒ其期限ヲ告知シ又闕席裁判ニ因リ刑ノ言渡ア  
リタル時ハ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得可キヲ及ヒ其期限ヲ言渡  
書ニ記載ス可シ

若シ其告知又ハ記載ナキ時ハ通常ノ規則ニ従ヒ其告知アルマテ上  
訴期限ノ經過ヲ停止ス

第三百十七條 書記ハ各事件ニ付キ各別ニ公判始末書ヲ作り左ノ條  
件其他一切ノ訴訟手續ヲ記載ス可シ  
一 裁判官公行シタルヲ又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡アリタルヲ及ヒ其  
事由

二 被告ノ訊問及ヒ其陳述

三 証人鑑定人ノ陳述及ヒ宣誓ヲ爲シタルヲ若シ宣誓ヲ爲セハ時  
ハ其事由

四 原被ノ證據物件



五辯論中異議ノ申立アリタルヲ後日ナ期シテ申立ツ可キ事件ヲ申立タルト是等ノ事件ニ付キ檢察官其他訴訟關係人ノ意見及ヒ裁判所ノ判決

六辯論ノ順序及ヒ被告人ヲシテ最終ニ發言セシメタルヲ

第三百十八條 公判始末書ニハ前條ニ記載シタル條件ノ外言渡ヲ爲シタル裁判所年月日裁判長陪席判事檢察官及ヒ書記ノ氏名ヲ記載ス可シ

辯論數日ニ渉ル時ハ其旨及ヒ同一ノ裁判官出席シタルヲ記載ス可シ

辯論中豫備判事ヲシテ代ラシメタル時ハ其旨ヲ記載ス可シ 檢察官及ヒ書記ニ付テモ亦同シ

第三百十九條 公判始末書ハ裁判言渡ヨリ三日内ニ之ヲ整理シ裁判長及ヒ書記署名捺印ス可シ

裁判長ハ署名捺印セサル以前ニ公判始末書ヲ檢閲シ若シ意見アル時ハ其紙尾ニ記載ス可シ

第三百二十條 裁判言渡書及ヒ公判始末書ノ正本ハ其裁判所ノ書記局ニ保存ス可シ

上訴アリタル時ハ裁判長及ヒ書記裁判言渡書及ヒ公判始末書ノ謄本ニ認印シ之ヲ上訴書類ニ添フ可シ

第二章 違警罪公判  
第三百二十一條 違警罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一 檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ懸シタル呼出狀  
二 豫審判事又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第三百二十二條 呼出狀ニハ呼出ヲ受ク可キ者ノ氏名職業住所出廷ノ日時被告事件及ヒ代人ヲシテ出廷セシムルヲ得可キ旨ヲ記載



不可シ若シ被付事件ノ記載ナキ場合ニ於テ被告人未ク其證人ヲ呼出シ、ル時ハ公廷ニテ其事件ノ告知ヲ受ケタル後其呼出及ヒ辨護ノ爲メ二日ノ猶豫ヲ求ムルコトヲ得

第三百二十三條 呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

第三百二十四條 違警罪裁判官ハ被告事件急速ヲ要スル時ハ公判ニ取掛ル前檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ對手人ノ立會ヲ要セスシテ檢證處分ヲ爲スコトヲ得

第三百二十五條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

又呼出ヲ受ケスシテ出廷シタル者ト雖モ訊問前其名刺ヲ書記ニ差出シタル時ハ裁判所ニ於テ證人トシテ其陳述ヲ聽クコトヲ得

第三百二十六條 書記ハ各事件毎ニ訴訟關係人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ

若シ其呼立ニ應セサル時ハ他ノ事件ノ裁判ヲ終リタル後其事件ヲ裁判ス可シ

第三百二十七條 違警罪裁判官ハ最初ニ被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ

官吏ノ作リタル證書又ニ申立書アル時ハ書記之ヲ朗讀ス可シ

第三百二十八條 違警罪裁判官ハ被告人ニ被告事件ヲ承認スルヤ否ヲ問フ可シ

若シ被告人代人ヲ以テ白狀ヲ爲ス時ハ其署名捺印シタル書面ヲ差出ス可シ

第三百二十九條 被告人ノ白狀アリタル時ハ他ノ證據ヲ差出スニ及ハス但裁判所ニ於テハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ差出サシムルコトヲ得



若レ白狀ナキ時ハ原被ノ證人ヲ訊問シ其他證憑アル時ハ之ヲ差出ス可シ

第三百三十條 檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ被害事件ヲ證明シ及ヒ要償ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ  
被告人民事擔當人又ハ其代人ハ答辯ヲ爲ス可シ

第三百三十一條 呼出ヲ受ケタル被告人民事擔當人又ハ其代人出廷

セサル時ハ檢察官及ヒ民事原告人ノ請求スル所ヲ聽キ闕席裁判ヲ爲ス可シ

民事原告人出廷セサル時亦同シ

第三百三十二條 闕席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ

因リ闕席シタル者又ハ其住所ニ之ヲ送達ス可シ  
闕席裁判ヲ受ケタル者故障ヲ爲サントスル時ハ言渡書ノ送達アリ

タルヨリ三日内ニ其申立書ヲ書記局ニ差出ス可シ

第三百三十三條 裁判所ニ於テハ先ツ故障ノ申立ヲ受理ス可キヤ否

ヲ判決ス可シ若シ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ書記ヨリ故障アリタルヲ及ヒ其事件ヲ公判ニ付ス可キ日時ヲ故障ノ對手人ニ通知

スル爲メ呼出狀ヲ送達ス可シ但シ其送達ト出廷トノ間少クモ二日ノ猶豫アル可シ

又公判ニ付ス可キ日時ヲ其前日ニ故障ノ申立人ニ報知ス可シ

第三百三十四條 故障ノ申立ヲ受理シタル場合ニ於テハ第三百二十

六條ヨリ第三百三十條マテノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ  
其裁判ニ闕席シタル者ハ故障ヲ爲スヲ得ス

第三百三十五條 犯罪ノ證憑充分ナラサル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ

言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百三十六條 被告事件違警罪ニシテ且証憑充分ナル時ハ法律ニ



從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百三十七條 被告事件重罪又ハ輕罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ其事件ヲ輕罪裁判所檢事ニ送致ス可シ但被告人ニ對シ勾留狀ヲ發スルヲ得

第三百三十八條

違警罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ニ控訴スルヲ得

一 被告人ハ拘留ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時

二 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言渡民事上治

安裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時

三 檢察官其他訴訟關係人ハ上ニ記載シタル原由アラサル時ト雖モ管轄違越權擬律ノ錯誤又ハ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時

第三百三十九條

控訴ヲ爲サントスル者ハ原裁判所ノ書記局ニ其中立書ヲ提出ス可シ但其申立ノ期限ハ對審裁判ニ付テハ言渡ヨリ三

日内又關席裁判ニ付キ故障アラサル時ハ本人又ハ其住所ニ言渡書ノ送達アリタルヨリ五日內トス  
控訴ヲ爲スノ申立アリタル時ハ書記ヨリ其旨ヲ對手人ニ通知ス可シ

第三百四十條

訴訟ニ關スル一切ノ書類ハ檢察官ヨリ控訴ヲ受ク可キ裁判所ノ書記局ニ之ヲ送致ス可シ

若シ檢察官控訴ノ申立人又ハ對手人ナル時ハ控訴ヲ受ク可キ裁判所ノ檢察官ニ其意見書ヲ差出ス可シ

第三百四十一條

控訴ヲ受ク可キ裁判所ニ於テハ書記局ヨリ訴訟關係人ニ對シ呼出狀ヲ發シタル後其裁判ニ取掛ル可シ

呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ



第三百四十二條 控訴ノ對手人ハ其裁判言渡アルマア何時ニテモ附帶ノ控訴ヲ爲スコトヲ得但附帶ノ控訴ハ公庭ニ於テ直チニ之ヲ申立ルコトヲ得

第三百四十三條 控訴ニ係ル事件ハ輕罪ノ裁判ヲ爲スニ付キ定メタル規則ニ從ヒ之ヲ裁判ス可シ

第三百四十四條 控訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ原裁判言渡ヲ認可スルノ言渡ヲ爲シ又ハ之ヲ取消シ更ニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第三百四十五條 第三百三十一條以下ノ規則ハ控訴ノ開席裁判ニ付キ得ス

第三百四十六條 檢察官其他訴訟關係人ハ違警罪事件ノ終審ノ對審裁判言渡ニ對シテ上告ヲ爲スコトヲ得

第三章 輕罪公判

第三百四十七條 輕罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一 檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀ハ二豫審判事輕罪裁判所會議局又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事

件ヲ移スノ言渡

第三百四十八條 呼出狀ニ付テハ第三百二十二條第三百二十三條ノ規則ニ從フ

第三百四十九條 被告事件罰金ノ刑ニ該ル可キ時ハ代人ヲ出廷

民事原告人及ヒ民事擔當人ハ代人ヲシテ出廷セシムルコトヲ得

テモ亦之ヲ適用ス

民事原告人及ヒ民事擔當人ハ代人ヲシテ出廷セシムルコトヲ得



第三百五十條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百五十一條 第三百二十四條ノ規則ハ豫審ヲ經サル輕罪事件ニモ亦之ヲ適用ス

第三百五十二條 檢察官ハ裁判長ヨリ被告人ノ氏名年齢職業住所及ヒ出生ノ地ヲ問ヒタル後被告事件ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ被告事件ヲ證明ス可シ  
調書又ハ申立書アル時ハ書記ヲシテ之ヲ朗讀セシメ次ニ原被告ノ陳述ヲ聽キ且證據物件ヲ被告人ニ示シ辯解ヲ爲サシム可シ

被告人及ヒ民事擔當人ハ答辨ヲ爲ス可シ  
第三百五十三條 檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ要價ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ  
被告人及ヒ民事擔當人ハ更ニ答辨ヲ爲スヲ得

第三百五十四條 罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人又ハ第二百六十九條ノ規則ニ從ヒ闕席裁判ヲ爲スヲ得可キ被告人其呼出ノ日時ニ出廷セサル時ハ闕席裁判ヲ爲ス可シ

第三百五十五條 闕席裁判ニ關スル第三百三十一條ヨリ第三百三十四條マテノ規則ハ此章ニモ亦之ヲ適用ス

第三百五十六條 闕席裁判ニ因リ禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ左ノ場合ヲ除クノ外刑ノ期滿免除ニ至ルマテ故障ヲ爲スヲ得

一 被告人本案ノ裁判前豫メ裁判ス可キ事件ヲ申立タル時

二 裁判言渡書ヲ本人ニ送達シタル時

三 被告人裁判執行ニ因リ刑ノ言渡アリタルヲ知リタルノ證アル時

第一ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ第二第三ノ場合ニ於テハ言渡アリタルヲ知リタルヨリ三日内ニ故障ヲ爲スヲ得



第三百五十七條 裁判所ニ於テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ

檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ新ナル證人ヲ

呼出シ鑑定人ヲ命ジ若クハ臨檢ヲ爲スヲ得但是等ノ處分ヲ爲ス

ニ付テハ第三編第三章ニ定メタル規則ニ從フ

又豫審ヲ經サル事件ニ付テハ豫審判事ヲシテ其指示スル所ノ條件

ニ付キ取調ヲ爲シ且其報告書ヲ差出サシムルヲ得

第三百五十八條 犯罪ノ證據充分ナラザル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ

言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

本條ノ場合ニ於テ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ爲ス可

シ

第三百五十九條 被告事件違警罪ナル時ハ終審ノ裁判言渡ヲ爲シ且

被告人勾留ヲ受ケタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百六十條 被告事件重罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ若シ豫審

ヲ經サル時ハ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ但被告人勾留

ヲ受ケタル時ハ勾引狀ヲ發ス可シ

訴訟書類及ヒ證據物件ハ檢察官ヨリ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

第三百六十一條 被告事件豫審ヲ經タル時ハ之ヲ其裁判所ノ會議局

ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

會議局ニ於テハ第二百五十三條第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ取調

ヲ爲シ被告人ヲ管轄裁判所ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百六十二條 會議局ノ言渡ニ因リ事件ヲ受理シタル場合ニ於テ

新ナル證據ヲ發見スルヲナクシテ其事件ヲ重罪ナリトスル時ハ管

轄違ノ言渡ヲ爲ス可シ

檢事ハ大審院ニ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲ス可シ

第三百六十三條 前二條ノ場合ニ於テハ會議局又ハ大審院ノ判決ヲ



ルマテ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ被告人ヲ其裁判所ノ監倉ニ留置スルノ言渡ヲ爲スヲ得

又第二百十條以下ノ規則ニ從ヒ保釋ニ付キ判決ヲ爲スヲ得

第三百六十四條 被告事件輕罪ニシテ且證憑充分ナル時ハ法律ニ從

ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

被告人禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ當然保釋責付ヲ取消シタル

者トス但上訴中更ニ保釋ヲ求ムルヲ得

第三百六十五條 檢察官其他訴訟關係人ハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判

所ノ裁判言渡ニ對シ控訴裁判所ニ控訴スルヲ得

一 檢察官ハ無罪免訴又ハ刑ノ言渡アリタル時但違警罪事件トシテ

言渡アリタル場合ニ於テハ其事件ヲ輕罪ナリトスル時

二 被告人ハ違警罪ニ付テノ言渡ヲ除クノ外刑ノ言渡ヲ受ケタル時

三 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要價ニ付テノ言渡民事上始

審裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時

四 檢察官其他訴訟關係人ハ警轄違越權擬律ノ錯誤又ハ無効ノ記載

アル規則ニ背キタル時

第三百六十六條 控訴ハ裁判言渡アリタルヨリ五日內ニ之ヲ爲スヲ

得

關席裁判ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニテモ故障

ヲ爲サスシア直チニ控訴ヲ爲スヲ得但第三百五十六條ノ場合ニ

於テハ五日內ニ之ヲ爲ス可シ

第三百六十七條 公訴ノ裁判言渡ニ對シ控訴アリタル場合ニ於テ被

告人勾留ヲ受ケタル時ハ檢察官ヨリ之ヲ控訴裁判所ノ監倉ニ移ス

可シ

第三百六十八條 第三百三十九條ヨリ第三百四十二條マテ及ヒ第三

百四十四條ノ規則ハ此章ニモ亦之ヲ適用ス



第三百六十九條

輕罪裁判所檢察事ノ控訴又ハ檢事長ノ附帶ノ控訴ア

リタル場合ニ於テ被告事件ヲ重罪ナリトスル時ハ第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ會議局ニ於テ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百七十條 控訴ノ闕席裁判及ヒ其故障ニ付テハ始審ノ闕席裁判及ヒ其故障ニ付キ定メタル規則ニ從フ

第三百七十一條 檢察官其他訴訟關係人ハ輕罪裁判所ノ終審ノ對審裁判言渡及ヒ控訴裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヲ得

第四章 重罪公判

第三百七十二條

重罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一 豫審判事又ハ輕罪裁判所會議局ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

二 控訴裁判所又ハ大審院ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第三百七十三條

重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ左ノ區別

第三百七十四條

公訴狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

一 被告事件ノ始末及ヒ加重減輕ノ模様

二 被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地

三 豫審ニ於テ採取シタル原被ノ證據

四 罪名法律ノ正條及ヒ重罪裁判所ニ移スノ言渡ノ概略

第三百七十五條

公訴狀ニハ重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ記載シタル

ルヨリ以外ノ事件又ハ被告人ヲ記載ス可カラス

第三百七十六條

重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ同一ノ被告人ニ對シ

附帶ニ非サル數個ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ檢察官ハ各別ニ

百十七

ニ從ヒ公訴狀ヲ作ル可シ

控訴裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作ル可シ

始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作り又ハ

重罪裁判所檢察官ノ職務ヲ行フ可キ檢事ヲシテ之ヲ作ラシム可シ

第三百七十四條

公訴狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

一 被告事件ノ始末及ヒ加重減輕ノ模様

二 被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地

三 豫審ニ於テ採取シタル原被ノ證據

四 罪名法律ノ正條及ヒ重罪裁判所ニ移スノ言渡ノ概略

第三百七十五條

公訴狀ニハ重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ記載シタル

ルヨリ以外ノ事件又ハ被告人ヲ記載ス可カラス

第三百七十六條

重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ同一ノ被告人ニ對シ

附帶ニ非サル數個ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ檢察官ハ各別ニ



公訴狀ヲ作りタル上ニテ各別ニ辯論ヲ爲スヲ裁判所長ニ請求スルヲ得

裁判所長ハ同一ノ公訴狀ニ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ其職權ヲ以テ各別ニ辯論ヲ爲サシムルヲ得又數箇ノ公訴狀ニ記載シタル事件ニ付キ同時ニ辯論ヲ爲サシムルヲ得

第三百七十七條 書記ハ被告人出廷ヨリ少クトモ五日前ニ公訴狀ノ

附本ヲ被告人ニ送達ス可シ  
被告人數名アル時ハ各別ニ其附本ヲ送達ス可シ

第三百七十八條

重罪裁判所長又ハ其委任ヲ受ケタル陪席判事ハ公

訴狀ノ送達アリタルヨリ二十四時ノ後書記ノ立會ニ依リ被告事件

ニ付キ被告人ヲ訊問シ且辯護人ヲ選任シタリヤ否ヲ問フ可シ

若シ辯護人ヲ選任セサル時ハ裁判所長ノ職權ヲ以テ其裁判所々屬ノ代理人中ヨリ之ヲ選任ス可シ

被告人及ヒ被告人ヨリ選任ノ中立ナキ時ハ被告人一名ヲシテ被告人數名ノ辯護ヲ爲サシムルヲ得

辯護人ヲ選任シタルヨリ三日ノ後ニ非ザレバ辯論ニ取掛ルヲ得ス

第三百七十九條

辯護人差支アル時若クハ被告人ヨリ之ヲ改選ス可

キ正當ノ事由ヲ申立タル時被告人自ラ辯護人ヲ選任スルニ非ザレ

ハ前條ノ規則ニ從ヒ裁判所長ヨリ之ヲ選任ス可シ但辯護人ヲ改選

シタル時ハ三日間辯論ヲ停止ス可シ

第三百八十條

書記ハ第三百七十八條ノ場合ニ於テ訊問ノ調査ヲ作

リ辯護人ヲ選任スルニ付キ其式ヲ履行シタルヲ記載ス可シ

辯論中辯護人ヲ改選シ及ヒ辯論ヲ停止シタル時ハ公判始末書ニ其

旨ヲ記載ス可シ

第三百八十一條

辯護人ナクシテ辯論ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ノ効



ナカル可シ

第三百七十七條ヨリ第三百七十九條マテノ規則ニ背キタルコアリ  
ト雖モ辯論ニ取掛ル前ニ非サレハ被告人ヨリ異議ノ申立ヲ爲スコ  
ト得ス

第三百八十二條 辯護人ハ第三百七十八條ノ處分アリタル後被告人  
ト接見スルコトヲ得

又書記局ニ於テ一切ノ訴訟書類ヲ閱讀シ且之ヲ抄寫スルコトヲ得  
辯護人ヲ除クノ外何人ト雖モ重罪裁判所ニ移スノ言渡アリタルヨ  
リ裁判言渡アルマテ被告人ト接見スルコトヲ得ス但被告人現ニ拘留  
ヲ受クル地ノ裁判所長ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラス

第三百八十三條 檢察官及ヒ民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證  
人ノ氏名目録ハ開廷ヨリ一日前之ヲ被告人ニ送達ス可シ  
被告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人ノ氏名目録ハ同上ノ期限内ニ

書記ヨリ之ヲ檢察官ニ送致シ民事ニ付キ呼出シタル證人ノ氏名目  
録ハ之ヲ民事原告人ニ送達ス可シ

第三百八十四條 前條ノ規則ニ從ヒ豫メ氏名ヲ通知セサル證人ノ陳  
述ハ事實參考ノ爲メニ非サレハ之ヲ聽クコトヲ得ス但對手人ヨリ異  
議ナキコトヲ申立タル時ハ證人トシテ其陳述ヲ聽クコトヲ得

第三百八十五條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ  
猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百八十六條 裁判長ハ開庭ノ日ニ當リ公庭ニ於テ陪席判事檢察  
官ノ面前ニテ開庭ス可キコトヲ陳述ス可シ但被告人ヲ呼出ス可カラ  
ス

第三百八十七條 裁判長辯論二日以上ニ渉ル可シト思料シタル時ハ  
重罪裁判所ニ在  
ノ地ノ裁判所判事一名ヲ以テ豫備陪席判事ト爲ス  
コトヲ得



第三百八十八條 裁判官檢察官及書記各其席ニ就キタル後即時ニ訊問及ヒ辨論ニ取掛ル可シ

裁判長ハ先ツ被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ若シ其答辭ト豫審中ノ陳述ト齟齬アリト雖モ公訴狀ニ記載シタル被告人ニ相違ナキ時ハ引續キ辯論ヲ爲ス可シ

第三百八十九條 書記ハ呼出シタル証人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ其呼立ニ應シタル証人ハ扣席ニ退カシメ陳述ヲ爲スニ當リ順次ニ之ヲ呼入ル可シ

第三百九十條 裁判長ハ書記ヲシテ公訴狀ヲ朗讀セシムルニ付キ注意シテ聽ク可キヲ被告人ニ告知ス可シ

第三百九十一條 裁判長ハ書記前條ノ朗讀ヲ終リタル後被告人ヲ訊問ス可シ 被告人豫審中ニ白狀シタル事件ヲ確認セス又ハ之ヲ取消サントス

第三百九十二條 裁判長ハ前條ノ訊問ヲ終リタル後證據ヲ差出スニ從ヒ其証憑ニ付キ辯論ヲ爲シ且自己ノ利益ト爲ル可キ反証ヲ差出スヲ得可キヲ被告人ニ告知ス可シ

第三百九十三條 裁判長ハ原告証人陳述ヲ終リタル毎ニ被告人ニ意見アリヤ否ヲ問フ可シ

第三百九十四條 証人ハ陳述ヲ爲シタル後其扣席ニ留ル可シ但裁判長ヨリ退廷ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ左ラス

陪席判事檢察官被告人及ヒ民事原告人ハ更ニ証人ヲ訊問スルヲ又証人ヲシテ他ノ証人ト對質セシムルヲ請求スルヲ得

第三百九十五條 裁判長ハ証人愛憎畏懼ノ念ヲ生シ被告人ノ面前ニ裁判長ハ職權ヲ以テ前項ノ處分ヲ爲スヲ得



於テ充分ナル陳述ヲ爲スコトヲ得サル可シト思料シタル時ハ檢察官  
民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其証人ノ陳述中被告人ヲ  
退席セシムルコトヲ得

裁判長ハ証人陳述ヲ終リタル後再ヒ被告人ヲ公廷ニ呼入レ其陳述  
シタル條件ヲ告知シ且被告人ニ意見アル時ハ之ヲ申立シム可シ

第三百九十六條 裁判長ハ第三百條ニ定メタル手續ノ終リタル後公  
訴ニ付キ辯論ノ終結シタルコトヲ言渡ス可シ

第三百九十七條 檢察官及ヒ被告人ハ辯論中ニ發見シタル條件ニ付  
キ豫審ヲ求ムルコトヲ得裁判所ニ於テ其請求ヲ認可シタル時ハ重罪  
裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ且其報告書  
ヲ差出サシム可シ

第三百五十七條 第一項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス  
第三百九十八條 辯論終結ノ言渡アリタル時ハ檢察官法律適用ノ爲

メ其意見ヲ陳述ス可シ

被告人及ヒ辯護人ハ檢察官ノ意見其當ヲ得サルコトヲ辨論スルヲ得

第三百九十九條 前條ノ辨論ヲ終リタル後民事原告人ハ私訴ニ附キ

其請求スル所ヲ陳述ス可シ被告人辯護人及ヒ民事擔當人ハ答辯ヲ

爲スコトヲ得

檢察官ハ私訴ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

裁判所ニ於テハ私訴ノ辨論ヲ延期スルコトヲ得但閉庭前之ヲ判決ス

可シ

第四百條 被告事件重罪ニシテ且證據充分ナル時ハ法律ニ従ヒ刑ノ

言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被

告人ヲ放免ス可シ

第四百一條 犯罪ノ證據充分ナラサル時ハ無罪ノ言渡ヲ爲シ且被告



人ヲ放免ス可シ  
又原被ノ要償ニ付キ第三百九十九條ノ規則ニ從ヒ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百二條 辨論中公訴狀ニ記載シタル事件ニ附帶セサル他ノ重罪輕罪ヲ發見シタル場合ニ於テ檢察官ノ請求アル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲サシメ本會又ハ次會ニ於テ本案ノ事件ト共ニ之ヲ裁判ス可シ

第四百三條 檢察官其他訴訟關係人ハ重罪裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シテ上告ヲ爲ス可シ

第四百四條 關席裁判ヲ爲スニハ裁判長書記ヲシテ公訴狀及ヒ必要ナリトスル豫審書類ヲ朗讀セシメ又原被証人ノ陳述ヲ聽ク可シ  
檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述シ民事原告人ハ要償ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

民事擔當人ハ答辨スルヲ得

第四百五條 關席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ本人又ハ其住所ニ送達ス可シ

第四百六條 關席裁判ニ係ル刑ノ言渡ニ對シテハ檢察官ニ非サレハ上告ヲ爲スヲ得ス

民事原告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ノ裁判言渡ニ對シテ上告ヲ爲スヲ得

第四百七條 關席裁判ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スヲ得但捕ニ就キタル時ハ十日以内ニ故障ヲ爲ス可シ

第四百八條 故障ノ申立ハ關席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所ニ之ヲ爲ス可シ

重罪裁判所ニ於テハ先ツ其故障ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ



其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ニ本會又ハ次會ニ於テ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ

第四百九條 闕席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所閉廳ノ後ハ其地ヲ管轄スル控訴裁判所ニ故障ノ申立ヲ爲ス可シ

控訴裁判所ニ於テ其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ重罪裁判所ノ裁判ヲ受ク可キノ言渡ヲ爲ス可シ

第五編 大審院ノ職務

第一章 上告

第四百十條 檢察官及ヒ被告人ハ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ左ノ場合ニ於テ上告ヲ爲ス可シ

一 法律ニ背キ忌避ノ申立ヲ認可セサル時

二 裁判所ノ構成規則ニ背キタル時

三 法律ニ背キ管轄違又ハ管轄ナリトノ言渡若クハ管轄ニ非サル裁判所ニ事件ヲ移スノ言渡アリタル時

四 法律ニ於テ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時又ハ無効ノ記載ヲ有シタル規則ニ背キタルニ因リ異議ノ申立アリタル場合ニ於テ之ヲ認可セサル時

五 法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサル時

六 法律ニ定メタル場合ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽カサル時

七 裁判所ニ於テ請求ヲ受ケタル事件ニ付キ判決ヲ爲サス又ハ職權ヲ以テ判決スルヲ得可キ場合ヲ除クノ外請求ヲ受ケサル事件ニ付キ判決ヲ爲シタル時

八 裁判言渡ヲ公行セズ又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡ナクシテ訊問及ヒ辯論ヲ公行セサル時

九 事實及ヒ法律ニ依リ言渡ノ理由ヲ付セズ又ハ其理由ノ粗鄙ナル時



十 權律ノ錯誤アル時

十一 越權ノ處分アル時

第四百十一條 免訴又ハ無罪ノ旨渡アリタル場合ニ於テハ被告人ノ利益ノ爲メ定メタル規則ニ背キタルト又ハ犯罪ノ場所ニ因リ管轄違アリト雖モ上告ヲ爲ス可ト得ス

第四百十二條 民事原告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ニ關スル豫審又ハ公判ノ旨渡ニ對シ第四百十條ニ定メタル理由ニ付キ上告ヲ爲ス可ト得

第四百十三條 上告ノ對手人ハ大審院ノ判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ上告ヲ爲ス可ト得 大審院檢事長モ亦附帶ノ上告ヲ爲ス可ト得

第四百十四條 上告ノ期限ハ三日ナリトス但豫審ニ付テハ旨渡書ノ送達アリタルヨリ起算シ公判ニ付テハ旨渡アリタルヨリ起算ス

第四百十五條 豫審又ハ公判ノ旨渡ニ對シ上告アリタル時ハ勾留保釋責付釋放及ヒ赦免ノ旨渡ヲ除ク外其執行ヲ停止ス

第四百十六條 上告ヲ爲サントスル者ハ其申立書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ 上告ノ申立書ハ其申立アリタルヨリ二十四時内ニ書記ヨリ之ヲ對手人ニ送達ス可シ

第四百十七條 上告申立人ハ其申立ヲ爲シタルヨリ五日内ニ趣意書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ 書記ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ之ヲ對手人ニ送達ス可シ

第四百十八條 對手人ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ五日内ニ答辯書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ 書記ハ其答辯書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ之ヲ上告申立人ニ

送達ス可シ



送達ス可シ

第四百十九條

檢察官ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答辨書ハ二通ヲ作り一通ヲ大審院ニ差出シ一通ヲ對手人ニ送達ス可シ  
私訴ノ裁判言渡ニ對シ訴訟關係人ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答辨書ニ付テモ亦同シ

第四百二十條

書記ハ前數條ニ定メタル期限經過シタル後速ニ訴訟書類及ヒ上告書類ヲ其裁判所ノ檢察官ニ差出ス可シ  
檢察官ハ其書類ヲ五日内ニ大審院檢察長ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ添フ可シ

檢察長ハ上告事件ヲ刑事局ノ簿冊ニ登記ス可キヲ院長ニ請求ス可シ

第四百二十一條

上告申立人及ヒ對手人ハ代官人ヲ差出ス可キ得  
重罪ノ刑ハ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲シ又ハ檢察官ヨリ重罪ノ刑

ニ該ル可キ者トシテ上告ヲ爲シタル場合ニ於テ刑ノ言渡ヲ受ケタル者自ラ代官人ヲ選任セザル時ハ院長ノ職權ヲ以テ其院所屬ノ代官人中ヨリ之ヲ選任ス可シ

第四百二十二條

院長ハ刑事局判事ニテ專任判事一名ヲ命ス可シ  
專任判事ハ一切ノ書類ヲ檢閲シ其報告書ヲ作ル可シ但自己ノ意見ヲ付ス可カラズ

第四百二十三條

上告申立人及ヒ對手人ハ專任判事ノ報告書ヲ差出スル時ハ大審院書記局ヲ經由シテ其趣意ヲ擴張ス可キ辨明書ヲ差出ス可キ得

專任判事報告書ヲ差出シタル後辨明書ヲ差出シタル時ハ之ヲ其報告書ニ添フ可シ

第四百二十四條

書記ハ開廷ヨリ三日前ニ開廷ノ日時ヲ上告申立人及ヒ對手人ノ代官人ニ報知ス可シ



第四百二十五條 開廷ノ日ニハ公廷ニ於テ專任判事其報告書ヲ朗讀ス可シ

檢事長及ヒ代言人ハ各其趣意ヲ辨明ス可シ  
私訴ノ上告ニ付テハ檢事長最終ニ其意見ヲ陳述ス可シ

第四百二十六條 上告申立人又ハ對手人ヨリ代言人ヲ選出サ、ル時ハ其儘ニテ判決ヲ爲ス可シ

第四百二十七條 大審院ニ於テ上告ノ理由ナシトスル時ハ之ヲ棄却スルノ旨渡ヲ爲ス可シ

第四百二十八條 大審院ニ於テ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對スル上告ニ付キ破毀ノ原由アリトスル時ハ其言渡ノ全部ヲ破毀シ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ但後ノ數條ニ記載シタル場合ハ此限ニ在ラス

第四百二十九條 擬律ノ錯誤若クハ法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサルヲ因リ原裁判言渡ヲ破毀シタル時ハ其事件ヲ移ス可シ

第四百三十條 豫審又ハ公判ノ手續規則ニ背キタルアリト雖モ其後ノ手續ニ利害ヲ及ボサル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス可シ

第四百三十一條 豫審又ハ公判ノ言渡ノ幾分ニ對シ上告アリタル場合ニ於テ他ノ部分ニ關係アラサル時ハ大審院ニ於テ其上告ニ係ル部分ヲ破毀シ法律ニ從ヒ直チニ相當ノ裁判言渡ヲ爲シ又ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス可シ

第四百三十二條 大審院ニ於テ原裁判言渡ヲ破毀シ直チニ裁判言渡ヲ爲シタル時ハ原裁判所又ハ他ノ裁判所ヲシテ其執行ヲ爲サシム可シ

第四百三十三條 大審院ニ於テ破毀シタル事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス可シ



言渡ヲ爲ス可キ時ハ原裁判所ニ接近シタル同等ノ裁判所ヲ定示ス可シ其單ニ私訴ニ係ル事件ハ之ヲ民事裁判所ニ移ス可シ

第四百三十四條

法律ニ係ル大審院ノ判決ハ確定ノ者トス

大審院ヨリ送付ヲ受ケタル裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ上告ヲ爲ス可キ得

第四百三十五條

法律ニ於テ罰セサル所爲ニ對シ刑ヲ言渡シ又ハ相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡シタル場合ニ於テ定期内ニ上訴スル者ナクシテ其裁判言渡確定シタル時ハ大審院檢事長ヨリ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何時ニテモ非常上告ヲ爲ス可キ得

非常上告アリタル時ハ原裁判言渡ヲ破毀シ大審院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百三十六條

左ノ場合ニ於テハ大審院ノ裁判言渡ニ對シ檢事長其他訴訟關係人ヨリ其院ニ哀訴スル可キ得

一 大審院ニ於テ前數條ニ定メタル式ヲ履行セサル時

二 訴訟關係人ヨリ申立タル條件ニ付キ判決ヲ爲サ、ル時

三 同一ノ裁判言渡ニ付キ二箇ノ條件齟齬シタル時

第四百三十七條

哀訴ヲ爲サントスル者ハ裁判言渡アリタルヨリ三日内ニ書記局ニ其申立ヲ爲ス可シ

書記ハ申立書ヲ受取リタルヨリ三日内ニ之ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ同一ノ期限内ニ其答辯書ヲ差出ス可シ

大審院ニ於テハ通常上告ノ規則ニ從ヒ哀訴ノ判決ヲ爲ス可シ

第四百三十八條

大審院ノ裁判言渡ハ其言渡アリタルヨリ三日間又哀訴アリタル時ハ其判決アルマテ執行ヲ停止ス

第二章 再審ノ訴

第四百三十九條

再審ノ訴ハ左ノ場合ニ於テ重罪輕罪ノ刑ノ言渡ニ對シ被告ノ利益ノ爲メ之ヲ爲ス可キ得但裁判確定ノ後ニ非サレ



ハ之ヲ爲ヌイテ得ス

一人ヲ殺シタル罪ニ付キ刑ノ言渡アリタル後其言渡ノ日ニ當リ殺

サレタリト認マラシ者現ニ生存シ又ハ犯罪前既ニ死去シタル

ノ確證アリタル時

二同一ノ事件ニ付キ共犯ニ非ヌシテ別ニ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ア

リタル時

三犯罪アル以前ニ作リタル公正ノ證書ヲ以テ當時其場所ニ在ラサ

ルイテ證明シタル時

四被告人ヲ陷害シタル罪ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタル時

五公正ノ證書ヲ以テ訴訟書類ニ偽造又ハ錯誤アルイテ證明シタル

時

第四百四十條

再審ノ訴ヲ爲ヌイテ得可キ者左ノ如シ

一刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官

二刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ヲ管轄スル控訴裁判所ノ檢察官

三大審院檢察長但司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲ヌ可

シ

四刑ノ言渡ヲ受ケタル者

五刑ノ言渡ヲ受ケタル者死去シタル時ハ其親屬

第四百四十一條

再審ノ訴ハ刑ノ消滅シタルニ拘ハラヌ何時ニテモ

第四百四十二條

再審ノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ原裁判言

渡書ノ原本及ヒ證書書類ヲ添ヘ之ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可

シ

原裁判所ノ檢察官ハ其書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ大審院檢察長ニ差

出ス可シ

原裁判所ノ檢察官及ヒ控訴裁判所檢察長自ラ再審ノ訴ヲ爲サント



スル時ハ前項ノ手續ニ從ヒ其書類ヲ差出ス可シ  
第四百四十三條 大審院ニ於テハ檢事長ノ請求ニ因リ速ニ專任判事  
一名ヲシテ其取調ヲ爲シ報告書ヲ差出サシム可シ

第四百四十四條 大審院ニ於テハ他ノ事件ヲ關キ刑事局判事全員會  
議局ニ集會シ專任判事ノ報告書及ヒ檢事長ノ意見書ニ依リ判決ヲ  
爲ス可シ

第四百四十五條 大審院ニ於テ再審ノ原由アルヲ認メタル時ハ原  
裁判言渡ヲ破毀シ公訴及ヒ私訴ニ付キ再審ヲ爲ス可キヲ言渡シ  
其事件ヲ原裁判所ト同等ナル他ノ裁判所ニ移ス可シ  
其送付ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ通常ノ規則ニ從ヒ裁判ヲ爲ス可  
シ

第四百四十六條 死者ノ親屬ヨリ再審ノ訴ヲ爲シタル場合ニ於テ大  
審院ニテ再審ノ原由アルヲ認メタル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ

移スヲナク原裁判言渡ヲ破毀ス可シ

第四百四十七條 再審ノ裁判ニ因リ無罪ノ言渡アリタル時又ハ前條  
ノ場合ニ於テ破毀ノ言渡アリタル時ハ其者ノ名譽ヲ復スル爲メ其  
言渡書ヲ揭示公訴ス可シ

第三章 裁判管轄ヲ定ムルノ訴

第四百四十八條 通常裁判所ト特別裁判所ト之間ハ管轄ニ非サル  
ノ言渡ヲ爲シ其言渡確定シタル時又忌避ノ原由若クハ非常ノ事變  
ニ因リ訴訟事件ヲ管理スルヲ能ハサル時ハ檢察官其他訴訟關係人  
ヨリ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲スヲ得  
大審院檢事長ハ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲スヲ  
得

第四百四十九條 裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意  
書ニ訴訟書類ヲ添ヘ之ヲ大審院ノ書記局ニ差出ス可シ



第四百五十條 大審院ニ於テハ刑事局判事五名以上會議局ニ集會シ  
專任判事ノ報告書及ヒ檢事長ノ意見書ニ依リ裁判管轄ヲ定ムルノ  
訴ヲ判決シ其事件ヲ管理ス可キ裁判所ヲ定示ス可シ

第四章

公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

第四百五十一條 犯罪ノ性質被告人ノ身分員數地方ノ民心其他重大  
ナル事情ニ因リ裁判ニ對シ紛擾又ハ危險ヲ生スルノ恐アル時ハ公  
安ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移ス可キ得

第四百五十二條 公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ司法卿ノ命ニ因  
リ大審院檢事長ヨリ其院ニ之ヲ爲ス可シ

第四百五十三條 大審院ニ於テハ會議局ニテ訴訟關係人ノ申立ヲ聽  
クテ速ニ前條ノ訴ヲ判決ス可シ

第四百五十四條 被告人ノ身分地方ノ民心又ハ訴訟ノ模様ニ因リ裁  
判ノ公平ヲ維持スルヲ能ハサルノ恐アル時ハ嫌疑ノ爲メ其事件ヲ

同等ナル他ノ裁判所ニ移ス可キ得

第四百五十五條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ管轄裁判所ノ檢  
察官其他訴訟關係人ヨリ之ヲ爲ス可キ得

民事原告人嫌疑アル裁判所ニ私訴ヲ爲シ又被告人其裁判所ニ於テ  
異議ノ申立ナシテ本案ニ付キ辯論ヲ爲シタル時ハ前項ノ訴ヲ爲  
ス可キ得

第四百五十六條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ヲ爲スニハ其趣意

書ニ通シ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ  
書記ハ速ニ一通ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ其送達アリタルヨリ三  
日內ニ答辯書ヲ差出ス可キ得

第四百五十七條 大審院ニ於テハ第四百五十條ノ規則ニ從ヒ前條ノ

訴ヲ判決ス可シ

第四百五十八條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴アリタル時ハ裁判



所ニ於テ其訴訟手續ヲ停止ス

第六編 裁判執行復権及ヒ特赦

第一章 裁判執行

第四百五十九條 重罪輕罪違警罪ノ刑ハ裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ執行ス可カラズ

第四百六十條 死刑ノ言渡確定シタル時ハ檢察官ヨリ速ニ訴訟書類ヲ司法卿ニ差出ス可シ

司法卿ヨリ死刑ヲ執行ス可キノ命令アリタル時ハ三日内ニ其執行ヲ爲ス可シ

第四百六十一條 死刑ヲ除クノ外刑ノ言渡確定シタル時ハ直チニ之ヲ執行ス可シ

第四百六十二條 刑ノ執行ハ原裁判所ノ檢察官又ハ大審院ヨリ命ヲ受ケタル裁判所ノ檢察官ノ指揮ニ因リ之ヲ爲ス可シ

罰金料料裁判費用及ヒ沒收物出ハ檢察官ノ命令書ニ依リ之ヲ徵收ス可シ  
破産又ハ廢棄ス可キ沒收物品ハ檢察官之ヲ處分ス可シ  
第四百六十三條 死刑ノ執行ニ付テハ書記其始末書ヲ作り刑ノ執行規則ニ從ヒ立會ヲ爲シタル官吏ト共ニ署名捺印ス可シ  
其他刑ノ執行ニ關スル方法細目ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム  
第四百六十四條 裁判官言渡確定シ又ハ關席裁判アリタル時ハ其刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ書記既決犯罪表ヲ作り左ノ條件ヲ記載ス可シ但大審院ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其執行ヲ爲シタル裁判所ノ書記之ヲ作ル可シ

- 一 犯人ノ氏名年齢職業住所及ヒ出生ノ地
- 二 罪名刑名
- 三 再犯



四 裁判言渡ヲ爲シタル年月日

五 對審裁判又ハ關席裁判

第四百六十五條

既決犯罪表ハ二通ヲ作り一通ヲ司法省ニ送致シ一通ヲ其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可シ

違警罪ノ既決犯罪表ハ一通ヲ作り其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可シ

第四百六十六條

刑ノ言渡ヲ受ケタル者其言渡ノ條件ニ付キ疑義ノ申立又ハ其執行ニ付キ異議ノ申立ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ

第四百六十七條

刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡ノ後捕ニ就キタル場合ニ於テ人違ノ申立アリタル時ハ之ヲ認定スル爲メ前ニ其罪ヲ認メタル裁判所ニ送致ス可シ  
裁判所ニ於テ本犯ナルヲ認定スルヲ能ハサル時ハ事實參考ノ爲メ會テ其事件ニ干預シタル裁判官檢察官書記又ハ原被ノ證人ヲ呼

出スヲ得

第四百六十八條

前二條ノ場合ニ於テハ公廷ニテ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ノ申立及ヒ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判言渡ヲ爲ス可シ但其言渡ニ對シテハ上訴ヲ許サス

第四百六十九條

賠償及ヒ訴訟關係人ニ償還ス可キ裁判費用ニ付キ其言渡ノ執行ハ通常民事ノ規則ニ從フ

第二章 復権

第四百七十條

復権ノ願ハ刑法第六十三條ニ定メタル期限經過シタル後刑ノ言渡ヲ受ケタル者ヨリ司法卿ニ之ヲ爲ス可シ  
復権ノ願書ニハ本人署名捺印シ現ニ住スル地ノ始審裁判所ノ檢事ニ之ヲ差出ス可シ

第四百七十一條

復権ノ願書ニハ左ノ書類ヲ添フ可シ  
一 裁判言渡書ノ謄本



二 主刑ノ満期特赦又ハ期滿免除ト爲リタルコトヲ證明スル書類

三 假出獄及ヒ假ニ監視ヲ免セシメタルノ證書

四 賠償及ヒ裁判費用ヲ辨濟シ又ハ其義務ヲ免カレタルノ證書

五 過去現在ノ住所及ヒ生計ヲ記載スル書類

第四百七十二條 検事ハ願人ノ品行其他必要ノ取調ヲ爲シ前條ノ書類ニ意見書ヲ添へ之ヲ控訴裁判所検事長ニ差出ス可シ

第四百七十三條 検事長ハ更ニ必要ノ取調ヲ爲シ復権ノ願ニ關スル書類ニ意見書ヲ添へ之ヲ司法卿ニ差出ス可シ

第四百七十四條 司法卿ハ復権ノ願ニ關スル書類ヲ檢閲シ其願ヲ允許ス可キ者ト認メタル時ハ速ニ上奏ス可シ

第四百七十五條 勅裁又ハ司法卿ノ意見ニ因リ復権ノ願ヲ棄却シタル時ハ司法卿ヨリ其旨ヲ控訴裁判所検事長ニ通知シ検事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所検事長ニ通知ス可シ

前項ノ場合ニ於テハ刑法第六十三條ニ定メタル期限ノ半ヲ經過スルニ非サレハ更ニ其願ヲ爲スコトヲ得ス  
更ニ復権ノ願ヲ爲スニ付テモ亦前數條ノ規則ニ從フ

第四百七十六條 復権ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ其裁可狀ヲ控訴裁判所検事長ニ送致シ検事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所

検事ニ送致ス可シ  
検事ハ裁可狀ノ謄本ヲ願人ニ下付ス可シ

又刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ裁可狀ノ謄本ヲ送致シ其裁判所ニ於テハ之ヲ裁判言渡書ニ記入ス可シ

第三章 特赦

第四百七十七條 特赦ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ檢察官又ハ監獄長ヨリ犯人ノ情狀ヲ具シ司法卿ニ申立ルコトヲ得

監獄長ヨリ特赦ノ申立ヲ爲ス時ハ檢察官ヲ經由ス可シ但檢察官ハ

百四十九



意見書ヲ添フ可シ  
特赦ノ申立アリタル時ハ司法卿ヨリ其書類ニ意見書ヲ添へ上奏ス  
可シ

第四百七十八條 司法卿ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ特赦ノ  
申立ヲ爲スコトヲ得

死刑ヲ除クノ外特赦ノ申立アリト雖モ刑ノ執行ヲ停止セス

第四百七十九條 特赦ノ申立棄却アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡

ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ其旨ヲ通知ス可シ

第四百八十條 特赦ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シ

タル裁判所ノ檢察官ニ特赦狀ヲ送致ス可シ此場合ニ於テハ第四百  
七十六條ノ規則ニ從フ

治罪法俗解畢

治罪法參考諸布告達

第一章 書類送達

書類送達ニ付治罪法第二十四條ノ制限有之候ヘトモ當分ノ内ハ不及  
其儀候事

第二章 印章

法律上判事檢事書記等署名捺印ヲ要スル節相用フヤキ印章ハ左ノ形  
形ニ照シ各自彫刻シ費用ハ官費支拂ニ相立候儀ト可心得此旨相達候  
事(司法省丁第二十一號達ニカハル)

官	勅任方九分 曲尺
氏名	奏任方七分 曲尺
	判任方六分 曲尺



書記ハ「裁判所書記某」ト刻ス字体ハ篆楷適宜ナルヘシ但認メ易キヲ要ス

治罪法中犯人証人等押印ノ條々實印無之者ニ限り從來ノ慣例ニ依リ押印爲致候儀ト心得ヘシ此旨相違候事(六號達ニカ、ル)

本年第五十四號公布ニ依リ治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開クハ其管轄輕罪裁判所ノ名稱ヲ用ヒ其印ヲ捺シ某治安裁判所ニ於テスル「附記」スヘシ左ニ離形相添此旨相違候事(司法省丁第二十七號達ニカ、ル)

書式離形

於八王子治安裁判所

橫濱輕罪裁判所

印章離形



裁判所印章ノ儀來明治十五年一月一日以後左ノ通改定候條各廳ニ於テ調製シ印鑑ヲ以テ可届出此旨相違候事(司法省丁第三十號達ニカ、ル)

印章離形

方曲一尺一寸五分



控訴  
始審  
治安  
輕罪  
違警罪

裁判所

各一願ヲ彫刻ス

字体ハ篆書ヲ用ヒ認易キヲ要ス且文字ノ數ニ據リ或ハ「之印」ノ字ヲ刻スルモ妨クナシ

別ニ註釋ヲ要セズ

第三章 書記局并訟廳等諸務

明治十年六月第四十七號達大審院裁判所屬ヲ廢シ更ニ大審院裁判所



書記ヲ置キ月俸左表ノ通相定候條此旨相違候事太政官第九十二號達ニカ、ル

四

大審院	書記
裁判所	書記
判	任
月俸五拾圓	月俸四十五圓
月俸四拾圓	月俸卅五圓
月俸卅圓	月俸廿五圓
月俸廿圓	月俸十五圓
月俸十五圓	月俸十二圓

書記局其他訟廷等ノ掌務心得書別紙ノ通相違候事司法省丁第十八號達ニカ、ル

書記局其他訟廷等ノ掌務心得書

第一條 書記局諸般ノ事務ハ各員輪轉之ヲ執リ豫メ其主掌ヲ定メス  
 第二條 訟廷ノ取締被告入扣所ノ看守ハ巡查獄卒等ヲシテ之ヲ掌ラ

第三條 訟廷口誦ハ雇員ヲ以テ之ニ充テ訴訟人呼入其他訟廷ニ關スル雜事ノ使用ハ小使ヲ以テ之ニ充ツヘシ

第四條 門候ヲ置クト否トハ其廳ノ便宜ニ任ス若シ之ヲ置ク作ハ雇員又ハ小使ヲ以テ之ヲ掌ラシムヘシ

但東京各裁判所ハ此限ニアラス

第五條 宿直ハ等外吏員雇員等ニテ之ヲ務メシメ在宅當番(退廳後)ニ云フハ判任官ニテ順次之ヲ務ムヘシ

但東京各裁判所ハ此限ニアラス

使丁規則別冊ノ通相定候條明治十五年一月一日ヨリ施行致スヘク此旨相違候事司法省丁第二十六號達ニカ、ル

使丁規則

第一條 各裁判所書記局ハ刑事民事ニ關スル召喚狀其他書類ヲ送達セシムル爲メ其請負人ヲ定メ之ヲ使丁取締トス

五



使丁取締ハ一人トス但場所ニ因リ二人以上ヲ命ズルコトアル可シ  
第二條 使丁ハ使丁取締之ヲ撰ヒ其氏名ヲ書記局ニ届出鑑札ヲ受ル  
モノトス

使丁ノ人員ハ使丁取締適宜ニ之ヲ定メ書記局ノ許可ヲ受ク可シ  
第三條 使丁取締ハ送達ノ事ニ付總テ其責ニ任スルモノトス  
第四條 使丁取締ハ常ニ裁判所ニ在テ送達ノ事ヲ取扱フベシ  
第五條 使丁ハ送達ヲ爲ス時裁判所ノ鑑札ヲ帶行スベシ  
第六條 送達ノ爲メニハ其法律規則ニ從フ可シ  
第七條 使丁取締及ヒ使丁ハ訴訟ニ付代人トナリテ訟廷ニ出ルコトヲ  
許サス

第八條 送達ノ事ニ關シ他人ニ損害ヲ被ラシメタル時ハ使丁取締其  
價ヲ擔當スヘシ  
但使丁ノ過失懈怠ニ由ル時ハ使丁取締ハ之ニ對シ更ニ其價ヲ求

ムルコトヲ得

第九條 送達賃錢ハ書體ノ大小ニ拘ハラヌ一通ニ付一里五錢以下ト  
ス賃錢ノ定限ハ使丁取締之ヲ申立書記局之ヲ決シ且送達書ニ其ノ  
賃錢高ヲ附記ス可シ

第十條 賃錢ノ定限ハ其取扱所ニ貼示シ三日以上新聞紙ニ掲載シ又  
ハ其ノ他ノ方法ヲ以テ公告ス可シ  
第十一條 刑事ニ付テノ送達賃錢ハ其送達ヲ受ルモノヨリ之ヲ拂置  
ク可シ

但左ノ場合ニ於テハ書記局ヨリ之ヲ拂置ク可シ  
一 檢察官又ハ裁判官ヨリ呼出ス証人鑑定人通事ノ呼出狀  
二 檢察官ノ控訴申立テ被告人ヘノ通知及ヒ呼出狀  
三 檢察官ヨリ被告人ヘ送達スル上告申立書及ヒ趣意書  
第十二條 刑事附帶ノ私訴及ヒ民事ニ付テノ送達賃錢ハ總テ其送達



ヲ請求スル者ヨリ之ヲ拂フ可シ

第十三條 送達賃銀ニ付テノ訴訟ハ其書類ヲ發シタル裁判所ニ之ヲ爲ス可シ

第十四條 使丁取締ハ書類送達ヲ正當ニ取扱フ可キ旨ノ書面ヲ書記局ニ差出ス可シ

第十五條 使丁取締及ヒ使丁此規則ニ違背シタル時裁判所書記局ハ使丁取締ニ左ノ條件中ニテ相當ノ言渡シヲ爲スベシ

一 廿圓以下ノ違約金ヲ納メシムルコト  
二 解職セシムルコト  
三 事情重キ者ハ違約金ヲ納メ解職セシムルコト

第十六條 使丁取締タルニハ其裁判所所在地ニ家屋ヲ有シ滿二十一年以上ノ者ニシテ書記局ノ試験ヲ經ルコトヲ要ス  
使丁取締タルニハ身元保証トシテ金五十圓以上ノ價格アル公債証

書地券又ハ銀行其他官許アル株券証券ヲ書記局ニ納ム可シ

但此保証金ハ解職ノ時下戻ス可シ

第十七條 試験ハ書記二名以上ニテ之ヲ爲ス可シ  
但書記不足ナルトキハ雇テ以テ之ニ充ツ可シ  
試験ノ科目ハ左ノ如シ

一 使丁規則

二 諸省郡村ノ地名又ハ里數

三 普通書簡ノ書讀

第十八條 實決ノ刑ニ處セラレタル者及ヒ身代限ノ處分ヲ受ケ未ク弁償ヲ終ラサル者ハ使丁取締又ハ使丁タルコトヲ許サス

治罪法實施ニ付テハ大審院其他各裁判所公廷取締ノ使用ニ供スルコト  
其院長所長ノ照會ニ應シ一名又ハ數名ノ巡查爲相詰又拘留被管人審問中ハ其護送ノ巡查職ハ押丁ヲシテ守卒トシテ公廷ニ入り看護セ



レムヘン此旨相違候事(太政官第八十六號達ニカ、ル)

第四章 裁判管轄

治罪法第四十條ニ犯罪ノ地ヲ以テ裁判管轄ト規定有之候處當分ノ内  
 犯罪ノ地分明ナル被告入ト雖モ管轄裁判所ヨリ囑託アリタル時ハ其  
 被告人逮捕ノ地ノ裁判所之ヲ管轄スヘシ(太政官第四十六號布告第二  
 項ニカ、ル)

刑法治罪法中違警罪裁判所ノ儀ハ當分三府五港ノ市區ヲ除クノ外府  
 縣警察署又ハ警察分署ニテ裁判可致候條此旨布告候事(太政官第四十  
 八號布告ニカ、ル)

各裁判所ノ位置及ヒ管轄ノ區畫別表ノ通改正シ明治十五年一月一日  
 ヨリ施行候條此旨布告候事(太政官第五十三號布告ニカ、ル)

裁判所ノ位置及ヒ管轄ノ區別

大		控訴	始審	治安	府縣	國名	區	郡	名
東		東		府		藏	日本橋區	京橋區ノ内	日本橋區 京橋區ノ内
東		東		府		藏	下谷區	京橋區ノ内	下谷區 神田區ノ内 北豊嶋ノ内
東		東		府		藏	淺草區	京橋區ノ内	淺草區 本所區ノ内 南足立南葛飾 ノ内 北豊嶋ノ内
東		東		府		藏	麹町區	京橋區ノ内	麹町區 神田區ノ内 牛込區 南豊島 ノ内
東		東		府		藏	四谷區	京橋區ノ内	四谷區 赤坂區 東多摩南豊島ノ内 荏原ノ内
東		東		府		藏	芝區	京橋區ノ内	芝區ノ内 麻布區 荏原ノ内 南豊島 ノ内



控 京

木更津	千葉	千葉	橫濱	品川	本所區	本郷區
木更津	八日市場	千葉	八王子	橫濱	品川	本所區
千葉縣	千葉縣	千葉縣	神奈川縣			
安上房總	上下總	上下總	相模	相模	相模	
天羽 周准 望陀 全國四郡	海上 香取 匝瑳 山邊 武射	下植生 千葉 印旛 上植生 夷隅 長柄 市原	津久井 南北西多摩	足柄上 足柄下 大住 陶綾 愛甲	橫濱區 久良岐 獨樹 都筑 三浦 鎌倉 高座	芝區ノ内 荏原ノ内
					本所區ノ内 深川區 南葛飾ノ内	本郷區 小石川區 神田區ノ内 北豐島ノ内

訴

前橋	熊谷	浦和	宇都宮	栃木	土浦	水戸
前橋	大宮	熊谷	宇都宮	栃木	下妻	土浦
群馬縣	埼玉縣	埼玉縣	栃木縣	栃木縣	茨城縣	茨城縣
	武藏	武藏	下野	下野	常陸	常陸
東群馬 北勢多 佐位 那波 利根	秩父	北埼玉 比企 男衾 橫見 大里 榛澤 旆羅 兒玉 賀美 那賀	中葛飾 北足立 新庄 入間 高麗 南埼玉 北葛飾	河内 芳賀 盞谷 那須	上野 下野 下野 猿嶋 結城 岡田 豐田 西葛飾	新治 筑波 河内 信太 行方 鹿島ノ内 北相馬 眞壁 猿嶋 結城 岡田 豐田 西葛飾
						東茨城 那珂 久埜 多賀 鹿島ノ内 西茨城







大坂中ノ島大坂府		本田	伏見	京都府山城	上京	相川	系魚川
河内	攝津	攝津	乙訓	下京區	上京區	相川	西頸城
讚良	東區南區ノ内	西區北區ノ内	紀伊久世相樂綴喜宇治ノ内	愛宕ノ内	葛野ノ内	新瀨縣佐渡	全國三郡
	東成ノ内	西成ノ内		高野ノ内	宇治ノ内		
	島上島下						
	能勢						
	豊島						

高田	長岡	新發田	新潟	岩村田
高田	六日市	新發田	新潟	岩村田
新潟縣越後	新潟縣越後	新潟縣越後	新潟縣越後	新潟縣越後
東頸城	南魚沼	刈羽ノ内	古志北魚沼三島刈羽ノ内	岩船
				北蒲原
				新潟區西蒲原中蒲原南蒲原
				北南佐久



訴

大津		津山	岡山		洲本	豐岡
小	大	山	高	山	本	岡
濱	津	岡	梁	島	兵	兵
福	滋	山		岡	庫	庫
井	賀	山		山	縣	縣
縣	縣	縣	備	備	淡	但
若	近	美	中	前	路	馬
狹	江	作				
邊	滋	全	上	小	全	全
敷	賀	國	房	田	國	國
大	野	十	阿	後	二	八
飯	洲	二	賀	月	郡	郡
	甲	郡	哲	下		
	賀		多	道		
	栗		川	窪		
	太		上	屋		
	浦			淺		
	生			口		
	高					
	島					

控

坂

姫	神	宮	園	
路	戶	津	部	天
姫	明	宮	福	王
路	石	宮	知	寺
兵	兵	津	山	
庫	庫	京	京	
縣	縣	都	都	
播	播	府	府	
磨	磨	丹	丹	河
		後	波	攝
				津
多	明	全	天	南
可	石	國	田	區
加	美	五	何	ノ
西	囊	郡	鹿	内
佐	加			西
用	東			成
安	加			ノ
栗	古			内
揖				東
東				成
揖				ノ
西				内
赤				住
穂				吉



判				
奈良	堺	七尾	魚津	
五條	堺	輪島	七尾	魚津
大坂府大和	大坂府	石川縣能登		
和	河內	和泉		
宇智吉野 葛上忍海 高市ノ内 葛下ノ内	添上 添下 廣瀬 宇陀 高市ノ内 萬下ノ内	大縣 安宿 志紀ノ内 丹北 丹南 八上 古市 石川 錦部	堺區 全國四郡	下新川 鹿島羽咋 珠洲 鳳至

裁							
富山	金澤	福井	彦根				
富山	高岡	小松	金澤	大野	福井	敦賀	彦根
石川縣越中		松石川縣			福井縣越前	賀福井縣若狹	根滋賀縣近江
上新川 婦負 射水ノ内 彌波ノ内 庄川以東	射水ノ内 彌波ノ内 庄川以西	能美 江沼	金澤區 河北 石川	大野	南條 今立 丹生 吉田 坂井 足羽	敦賀 三方	神崎 愛智 犬上 坂田 伊香 東淺井 西



所						
和歌山	田邊	德島	脇	高知	中村	高松
和歌山	邊田	島德	町脇	知高	村中	丸高
和歌山	邊和歌山	島德島	町德島	知高知	村高知	愛媛
縣紀伊	縣紀伊	縣阿波	縣阿波	縣土佐	縣土佐	縣讚岐
和歌山區伊都那賀名草海部有田	日高東牟婁西牟婁	名東名西勝浦那賀海部板野	美馬三好麻植阿波	安藝香美長岡土佐吾川高岡幡多	大内寒川三木山田香川阿野内小豆	那珂多度三野豐田鶴足阿野内

名古				名古			
岡崎	一ノ宮	名古屋	名古屋	宇和島	大洲	松山	松山
岡崎	一ノ宮	田愛知	名古屋	宇和島	大洲	條愛媛	松山
愛知縣		尾張		伊豫		伊豫	
額田	丹羽	知多	名古屋	東南	喜多	野間	温泉
碧海幡豆	葉栗中島	愛知内	名古屋區	宇和	西宇和	久米風早	上浮穴和氣伊豫
東加茂		海東	愛知内	宇和	宇摩	下浮穴和氣伊豫	
			春日井	宇摩	新居周布		
			海西	宇摩	桑村越智		



控		訴		裁		判		所	
豐橋	安濃津	安濃津四日市三重縣	上野	山田山田三重縣	岐阜	岐阜	岐阜	岐阜	岐阜
紀伊勢	伊勢	伊勢	伊賀	伊勢	伊勢	伊勢	伊勢	伊勢	伊勢
八名 南設樂寶飯渥美	河曲鈴鹿奄藝安濃飯高一志飯野 (南北)牟婁	桑名員部朝明三重	全國四郡	多氣度會 答志英虞	厚見羽栗各務中島方縣山縣武儀郡上 益田ノ内	海西上石津多藝不破本巢席 田安八池日大野	賀茂可兒土岐惠那	美濃	美濃

控		訴		島		廣		高	
山口縣	山口縣	山口縣	山口縣	山口縣	山口縣	山口縣	山口縣	山口縣	山口縣
長門	周防	長門防	周防	備後	安藝	安藝	安藝	飛騨	飛騨
大津阿武見島	赤間關區厚狹豐浦	能毛大島玖珂	都濃佐波吉敷	御調甲奴世羅深津品治沼隈 瀧田安那神石	高田三谿奴可三上三次惠蘇	廣島區沼田安藝佐伯山縣高宮 加茂豐田	大野吉城益田ノ内	山口縣	山口縣



長	所				判	載
長崎	西	鳥	米	濱		松
島	鄉	取	子	田	今	松
原	西	鳥	米	濱	市	江
長崎縣肥前	鄉	取	子	田		島
	嶋	鳥	鳥	島		根
	根	取	取	根		縣
	縣	縣	伯	石		出
	隱	因	耆	見		雲
南高來	岐	幡			神門出雲	大原
	全國四郡	全國八郡	全國六郡	全國六郡	楯縫飯石	意宇能義
	長崎區北高來東彼杵西彼杵ノ内					秋鹿嶋根仁多

控		嶺				佐	
福	嚴	福	平	佐			
岡久留米	原嚴	江福	戶平	賀			
小倉	福岡	江長崎縣肥前	戶長崎縣肥前	唐津		佐賀	
豐前	對馬	肥前	肥前	長崎縣肥前			
遠賀	全國二郡	南松浦西彼杵ノ内	北松浦	東松浦		基肄養父三根神崎佐賀小城	
企救田川京都中津筑城上毛	福岡區席田粕屋宗像穗波早良		全國二郡	西松浦			
遠賀鞍手	嘉麻上座下座夜須御笠志摩						
	怡土那珂						
	全國十郡						



		判			裁		
宮崎	大島	水引	鹿兒島		天草	八吉	八代
			鹿兒島				
		鹿島縣			熊本縣肥後		
		大隅	大隅	薩摩	薩摩		
宮崎 兒湯 諸縣ノ内 那珂ノ内		大島	薩摩 高城 伊佐 額島 日置ノ内 出水ノ内 菱刈	大隅 肝屬 熊毛 大隅 桑原 始羅 噌吹 馭護	天草	求麻	八代 釐北

		訴					
熊本	山鹿	熊本	豆田	中津	大分	佐伯	大分
熊本縣肥後		大分縣		大分縣豐後			
		豐後	豐前				
山鹿 山本 菊池 玉名		玖珠 日田	下毛 宇	東國 東速見ノ内	直入 大野ノ内	南海部 北海部ノ内 大野ノ内	大分 北海部ノ内 大野ノ内 速見ノ内











小笠原島裁判事務當分東京府出張所ニテ治安裁判所即チ違警罪裁判所始審裁判所即チ輕罪裁判所ノ權限ヲ以テ裁判セシメ民事控訴及重罪裁判ハ東京控訴裁判所ノ管轄ト相定明治十五年一月一日ヨリ施行候條此旨布告候事(太政官第五十六號布告ニカ、ル)

但該島ニ於テ治罪ノ手續ハ適宜取扱フ可シ

伊豆七島裁判事務當分該島吏ヘ民事ハ百圓以下及勸解并ニ刑事ハ違

警罪ノ裁判ヲ委任シ民事百圓以上刑事輕罪以上ハ東京始審裁判所ノ

管轄ト相定明治十五年一月一日ヨリ施行候條此旨布告候事(太政官第

五十七號布告ニカ、ル)

裁判所順次別紙ノ通相定候條此旨相違候事(司法省丁第十六號達ニカ、ル)

裁判所順次

大審院

控訴裁判所

東京 大坂 長崎 函館 名古屋 宮城 廣島

始審裁判所

東京 横濱 新潟 浦和 千葉 熊谷 土浦 木更津 朽木

宇都宮 前橋 水戸 甲府 静岡 上田 長野 高田 濱松 松本

長岡 新發田 相川

以上東京控訴裁判所管內

京都 大坂 神戸 堺 奈良 和歌山 姫路 大津 園部 彦根

宮津 洲本 田邊 德島 岡山 豊岡 津山 脇町 高松 福井

金澤 富山 七尾 高知 松山 中村 宇和島

以上大坂控訴裁判所管內

長崎 佐賀 平戸 福岡 熊本 福江 中津 大分 天草 嚴原

鹿兒島 宮崎



以上長崎控訴裁判所管内

函館 弘前 八戸

以上函館控訴裁判所管内

名古屋 岐阜 岡崎 安濃津 山田 高山

以上名古屋控訴裁判所管内

仙臺 磐井 福島 米澤 若松 山形 盛岡 白川 平 大曲

秋田 酒田

以上宮城控訴裁判所管内

廣島 尾道 山口 濱田 松江 米子 鳥取 西郷

以上廣島控訴裁判所管内

治安裁判所

治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開ク時ハ當分ノ内其所在ノ地警部ヲシテ檢事ノ職務ヲ代理セシム

右奉 勅旨布告候事(太政大臣司法卿連署第七十一號布告ニカ、ル)

本年十月第五十三號布告裁判所名稱區劃表始審ノ行中相川豊岡洲本  
田邊脇町高山西郷平戸福江嚴原天草大曲八戸ノ名稱ヲ削除シ其管轄  
ハ相川ヲ新潟ニ豊岡ヲ姫路ニ洲本ヲ神戸ニ田邊ヲ和歌山ニ脇町ヲ徳  
島ニ高山ヲ岐阜ニ西郷ヲ松江ニ平戸福江嚴原ヲ長崎ニ天草ヲ熊本ニ  
大曲ヲ秋田ニ八戸ヲ弘前ニ合併ス

右奉 勅旨布告候事(太政大臣司法卿連署第七十六號布告ニカ、ル)

本年十月第五十四號ヲ以テ輕罪ニシテ豫審ヲ要セザルモノニ限り治  
安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開クヲ得ベキ旨布告候處當分ノ内相川  
豊岡洲本田邊脇町高山西郷平戸福江嚴原天草大島大曲八戸ノ各治安  
裁判所ニ於テハ輕罪裁判所ヲ開キ總テノ輕罪ヲ裁判スルコトヲ得ヘ  
シ

但本文ノ場合ニ於テ訟廷内治罪ノ手續等ハ本年第五十四號布告但